

9.7 動物

9.7 動 物

(1) 調 査

1) 調査の内容

① 動物相の特徴

生息種及び動物相（哺乳類、鳥類（猛禽類を含む）、両生類・爬虫類、魚類、底生動物、昆虫類）の特徴を調査した。

② 保全すべき種の状況

保全すべき種の生息域、個体数及び生息環境を調査した。

2) 調査方法

① 動物相の特徴

以下に示す方法により現地調査を実施した。

(ア) 哺乳類

7) 直接観察法

調査範囲内を広く踏査して確認された種・数を記録した。

4) フィールドサイン法

調査範囲内を広く踏査して、活動個体の目撃、死体取得による確認の他、足跡・糞・巣穴・食痕等の生活痕により生息の有無を判断し、その確認状況と地点を記録した。

9) トラップ法

調査範囲内の緑地 1 地点、周辺の緑地 2 地点において小型哺乳類を対象としたシャーマントラップを設置した。

1) 無人撮影法

調査範囲内において、中型哺乳類の利用が想定される 3 地点に無人撮影装置を設置した。無人撮影装置は、1 地点あたり 1 台を、1 回あたり 1 晩設置した。

2) 夜間調査

コウモリ類を対象に、バットディテクター（コウモリ類の超音波を受信する機器）による生息確認を行った。

(イ) 鳥類（猛禽類を含む）

7) 任意観察法（夜間調査含む）

調査範囲内を広く踏査して、双眼鏡を使用し、目視及び鳴き声によって確認された種を記録した。調査時間帯は鳥類の活動が活発な午前中を中心に実施した。夜間調査は、フクロウ等の夜行性鳥類を対象に、日没後 2 時間程度、鳴き声等の確認を行った。

4) ラインセンサス法

調査範囲内に踏査ルートを設け、時速約 2 km で歩行し、直接観察あるいは鳴き声などで識別し、確認された種・個体数、確認環境、繁殖行動等を記録した。

リ) ポイントセンサス法

調査範囲内に設定した調査地点（2 地点）において、双眼鏡や望遠鏡を使用し、確認された種・個体数、確認環境、繁殖行動等を記録した。調査時間帯は鳥類の活動が活発な午前中を中心に実施した。

1) 定点観察法（猛禽類）

調査範囲内に設定した調査地点（3 地点）において、双眼鏡や望遠鏡を使用し、猛禽類の行動の観察を行い、飛翔状況（個体の識別や飛翔経路、特徴的な行動等）を記録した。
なお、猛禽類の繁殖が想定された場合には林内踏査を実施した。

（ウ）爬虫類・両生類

7) 直接観察法

調査範囲内を広く踏査して、爬虫類・両生類の出現が予想される草地、林縁部、水域等を中心に目視や鳴き声による確認等を行い、確認された種・数を記録した。また、繁殖場所を確認した場合には、繁殖の規模（卵塊、幼生の数等）を記録した。

（エ）魚 類

7) 直接観察法

調査範囲から三ヶ山緑地公園へ流れる水路内の 1 地点において、目視で確認された種・数を記録した。

1) 捕獲調査法

調査範囲から三ヶ山緑地公園へ流れる水路内の 1 地点において、投網、タモ網、セルびん等を用いて捕獲し、種・数を記録した。

（オ）底生動物

7) 直接観察法

調査範囲から三ヶ山緑地公園へ流れる水路内の 1 地点において、サーバーネットを用いて採集し、室内にてソーティング、実体顕微鏡を用いた種の同定を行った。

1) 任意採集法

調査範囲から三ヶ山緑地公園へ流れる水路内の 1 地点において、D フレームネット、サデ網等を用いて採集し、室内にてソーティング、実体顕微鏡を用いた種の同定を行った。

リ) 定量採集

サーバーネット（目合 0.3mm、25cm×25cm）を 1 地点あたり 4 回使用して底生動物を採集した。採集した個体は 10%中性ホルマリンで固定して持ち帰り、室内にてソーティング、実体顕微鏡を用いた種の同定を行った。

(カ) 昆虫類

7) 直接観察法及び任意採集法

調査範囲内を任意に踏査して、目視や鳴き声による確認のほか、必要に応じて見つけ採りやスウィーピング法及びビーティング法による任意採集を行った。

イ) ライトトラップ法

ボックス型のライトトラップにより、調査範囲内の植栽環境(1 地点)及び周辺の樹林環境(1 地点)、草地環境(1 地点)において、蛍光灯(白色・ブラックライト)とその下のロート部からなる捕虫器を一晩設置し、灯火に集まりロート部に落ちた昆虫類を採集した。調査範囲内の緑地 1 地点、周辺の緑地 2 地点において、夜間、白布のスクリーンに蛍光灯を点灯して、誘引される夜行性昆虫を採集し、確認した種を記録した。

ウ) ベイトトラップ法

調査範囲内の植栽環境(1 地点)及び周辺の樹林環境(1 地点)、草地環境(1 地点)において、誘引餌(さなぎ粉)を入れたトラップを、トラップの口が地表面と同じになるように埋設し、落ち込んだ昆虫を採集し、記録した。

② 保全すべき種の状況

保全すべき種は、現地調査で確認された種のうち、表 9.7-1 のいずれかに相当する種を保全すべき動物種とし、保全すべき種を確認した場合は、個体数、確認位置、確認状況等を記録した。

表 9.7-1 保全すべき種の選定基準

No.	文献及び法令名	区分	略号
①	文化財保護法 (昭和 25 年、法律第 214 号)	特別天然記念物 天然記念物	特天 天
②	絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律 (平成 4 年、法律第 75 号) (以下「種の保存法」という。)	国内希少野生動植物種 国際希少野生動植物種 特定国内希少野生動植物種	国内 国際 特定
③	埼玉県文化財保護条例 (昭和 30 年、埼玉県条例第 46 号) (以下「埼玉県文化財」という。)	県指定天然記念物	県天
④	埼玉県希少野生動植物の種の保存に関する条例 (平成 12 年、埼玉県条例第 11 号) (以下「埼玉県保護条例」という。)	県内希少野生動植物種	希少
⑤	環境省レッドリスト 2020 (環境省報道発表資料 2020 年) の掲載種 (以下「環境省 R L 2020」という。)	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 情報不足 絶滅のおそれのある地域個体群	EX EW CR+EN CR EN VU NT DD LP
⑥	埼玉県レッドデータブック 動物編 2018 (第 4 版) (平成 30 年、埼玉県環境部みどり自然課) (以下「埼玉県 R D B 2018」という。)	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 準絶滅危惧 1 型 準絶滅危惧 2 型 情報不足 絶滅のおそれのある地域個体群 地帯別危惧	EX EW CR+EN CR EN VU NT NT1 NT2 DD LP RT

3) 調査範囲・調査地点

調査範囲は図 9.7-1 に示す調査範囲とし、計画地 (緩衝緑地を除く) ^{注 1)} 及びその周辺 200m の範囲を基本とし、猛禽類の調査では適宜範囲を広げて実施した。

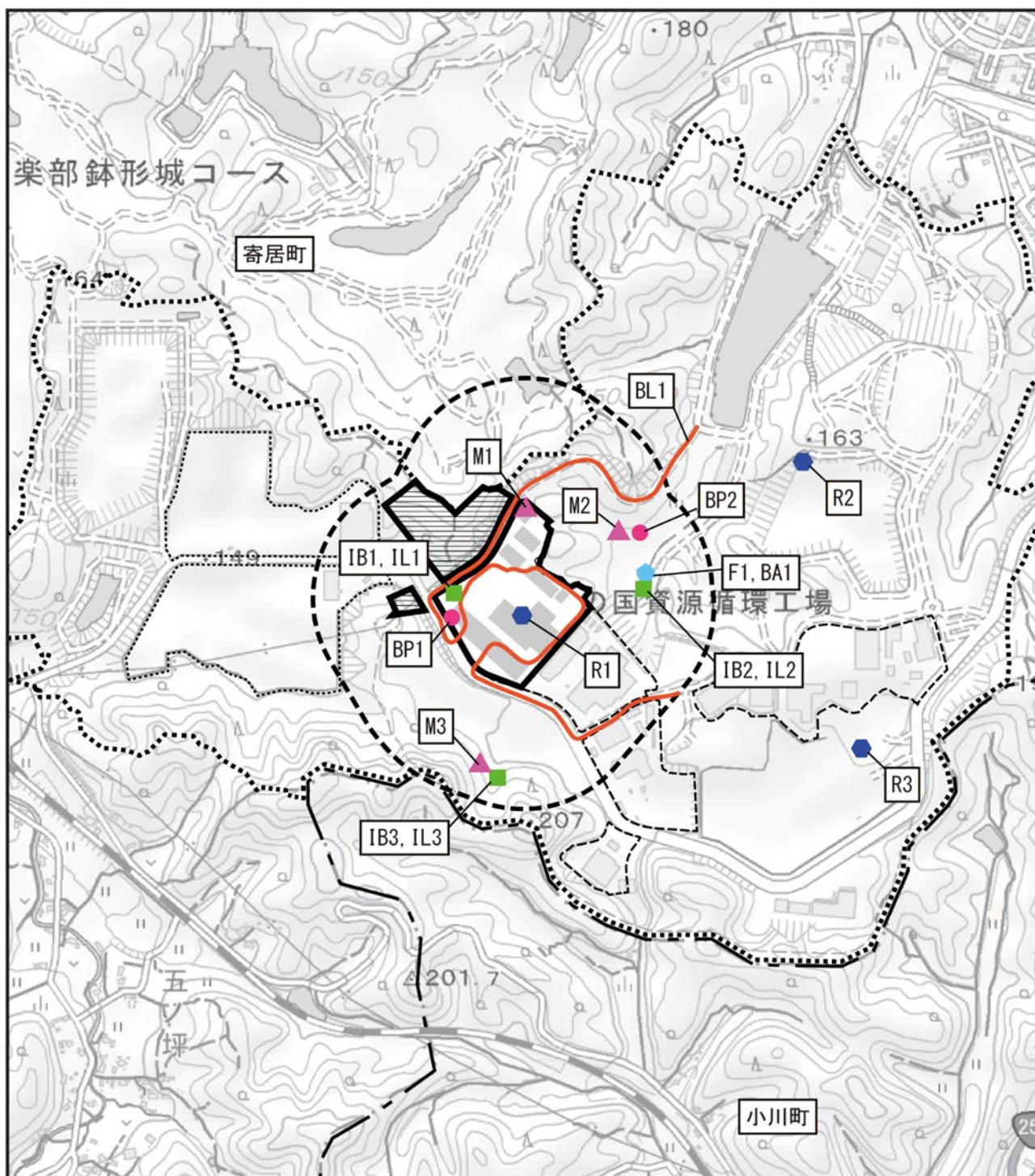
調査地点一覧は表 9-7.2 に示すとおりとした。

注) 計画地は緩衝緑地を含む区域であるが、計画施設の建替・増設を行う区域は、緩衝緑地を除く既存施設が立地している区域である。このため、調査は、土地改変を伴う計画地 (緩衝緑地を除く区域) とその周辺 200m の範囲を基本として行うこととした。なお以降では、計画地のうち緩衝緑地を除く区域を「計画施設用地」と呼称した。

表 9.7-2 調査地点一覧

区分	調査地点名		選定理由
哺乳類	M1～M3	哺乳類トラップ地点 ・計画施設用地の植栽環境(M1) ・周辺の草地環境(M2)、 樹林環境(M3)	計画施設用地及びその周辺において代表的な環境である植栽環境、草地環境、樹林環境におけるネズミ類等の小型哺乳類が把握できる地点を選定した。
鳥類（猛禽類を含む）	BL1	鳥類ラインセンサスルート	計画施設用地及びその周辺において代表的な環境である植栽環境、樹林環境、草地環境における鳥類相が把握できるルートを選定した。
	BP1～BP2	鳥類定点調査地点	計画施設用地及びその周辺において、計画施設用地や周辺の緑地を見渡せる地点を選定した。
	R1～R3 注)	猛禽類定点調査地点	計画施設用地及び周辺において、調査範囲を広く見渡せる地点を選定した。
魚類 底生動物	F1 BA1	魚類・底生動物定量採集地点	計画施設用地北側を流れる水路内の地点を選定した。
昆虫類	IB1～IB3 IL1～IL3	昆虫類トラップ地点 ・計画施設用地の植栽環境(IB1, IL1) ・周辺の草地環境(IB2, IL2)、 樹林環境(IB3, IL3)	計画施設用地及びその周辺において代表的な環境である植栽環境、草地環境、樹林環境における昆虫類相が把握できる地点を選定した。

注) 猛禽類定点調査地点は、R1～R3の3地点のうち、猛禽類の出現状況等に応じて任意の2地点で調査を行った。



この地図は「電子地形図25000」（令和2年2月調製、国土地理院）を使用して作成したものである。



4) 調査期間

① 動物相の状況

動物相の特徴の調査期間等は、表 9.7-3 に示すとおりである。

表 9.7-3 動物の調査期間

調査項目	調査方法	調査季	調査期間
哺乳類	直接観察法 フィールドサイン法 トラップ法 無人撮影法 夜間調査	秋季 冬季 春季 夏季	令和 2 年10月22日～23日 令和 2 年12月24日～25日 令和 3 年 5 月10日～11日 令和 3 年 7 月 1 日～ 2 日
鳥類（猛禽類を含む）	任意観察法 夜間調査	秋季 冬季 春季 繁殖期 夏季	令和 2 年10月22日～23日 令和 3 年 1 月20日～21日 令和 3 年 5 月10日～11日 令和 3 年 6 月 2 日～ 3 日 令和 3 年 7 月 1 日～ 2 日
	ラインセンサス法 ポイントセンサス法	秋季 冬季 春季 繁殖期 夏季	令和 2 年10月23日 令和 3 年 1 月21日 令和 3 年 5 月11日 令和 3 年 6 月 3 日 令和 3 年 7 月 1 日
	定点観察法	1 月 2 月 3 月 4 月 5 月 6 月 7 月	令和 3 年 1 月20日～21日 令和 3 年 2 月 8 日～ 9 日 令和 3 年 3 月 9 日～10日 令和 3 年 4 月15日～16日 令和 3 年 5 月11日～12日 令和 3 年 6 月 7 日～ 8 日 令和 3 年 7 月19日～20日
爬虫類・両生類	直接観察法	秋季 早春季 春季 夏季	令和 2 年10月22日～23日 令和 3 年 3 月26日 令和 3 年 5 月10日 令和 3 年 7 月 1 日～ 2 日
魚類	直接観察法 捕獲調査法	春季 夏季	令和 3 年 5 月10日 令和 3 年 7 月 2 日
底生動物	直接観察法 任意採集法 定量採集法	春季 夏季	令和 3 年 3 月26日 令和 3 年 7 月 1 日
昆虫類	直接観察法及び 任意採集 ライトトラップ法 ベイトトラップ法	秋季 冬季 春季 初夏 夏季	令和 2 年10月26日～27日 令和 3 年 2 月 8 日～ 9 日 令和 3 年 5 月10日～11日 令和 3 年 6 月 2 日～ 3 日 令和 3 年 7 月19日～20日

5) 調査結果

① 動物相の状況

(ア) 動物相の概況

現地調査の結果、哺乳類 6 目 9 科 14 種、鳥類 11 目 26 科 52 種 (猛禽類 2 目 2 科 8 種)、爬虫類・両生類 3 目 10 科 12 種、魚類 1 目 1 科 1 種、底生動物 17 目 36 科 53 種、昆虫類 18 目 213 科 984 種が確認された。

動物相の概況は表 9.7-4 に示すとおりである。

表 9.7-4 動物相の概況 (現地調査)

項目	確認種数	主な確認種
哺乳類	6 目 9 科 14 種	アズマモグラ、ヒナコウモリ、ノウサギ、ホンダアカネズミ、カヤネズミ、アライグマ、ホンダタヌキ、ホンドキツネ、ホンドテン、ホンDOIタチ、ニホンアナグマ、イノシシ、ニホンジカ等
鳥 類	11 目 26 科 52 種 ^{注1)}	コジュケイ、キジバト、コゲラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ガビチョウ、メジロ、スズメ、ハクセキレイ、ホオジロ、カワウ、ヤマガラ等
	2 目 2 科 8 種 (猛禽類) ^{注2)}	ハチクマ、トビ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、チョウゲンボウ、ハヤブサ
爬虫類・両生類	3 目 10 科 12 種	トウキョウサンショウウオ、アズマヒキガエル、ニホンアマガエル、ヤマアカガエル、ヌマガエル、シレーゲルアオガエル等
魚 類	1 目 1 科 1 種	ホトケドジョウ
底生動物	17 目 36 科 53 種	コシダカヒメモノアラガイ、サカマキガイ、ヒラマキミズマイマイ、マメシジミ属、ミズミズ科、フトミズ科、ヌマビル、ミズムシ (甲)、シナヌマエビ、カワリヌマエビ属、シオカラトンボ等
昆虫類	18 目 213 科 984 種	シオカラトンボ、オオカマキリ、ヒゲジロハサミムシ、ツユムシ、マダラスズ、ヒナバッタ、ベッコウハゴロモ、トバヨコバイ、ウルマーシマトビケラ、チャバネセセリ、ツバメシジミ、モンキチョウ、アオメアブ、ナガマルガタゴミムシ、オオヒラタシデムシ、アオドウガネ、サビキコリ、ナナホシテントウ、クロヒメハナノミ、ミヤマカミキリ、ウリハムシ、スグリゾウムシ、タデハバチ、ムネアカオオアリ、トビイロケアリ、セイヨウミツバチ、アカガネコハナバチ等

注1) 鳥類調査で確認された確認種数であり、猛禽類も含んでいる。

注2) 猛禽類調査で確認された確認種数である。

(イ) 哺乳類

7) 確認種

現地調査の結果、哺乳類は表 9.7-5 に示す 6 目 9 科 14 種が確認された（トラップ法により確認された哺乳類は資料編 p. 6-1 参照）。

計画施設用地は、荒川の支川である天神沢川の流域に位置しており、彩の国資源循環工場内の既存施設用地となっている。計画施設用地及びその周辺の土地利用状況や植物調査結果から、計画施設用地は工場や道路などの舗装された環境の中に、小規模な芝地や路傍雑草、植樹帯が点在している環境で、計画施設用地周辺は、大半がコナラ群落であり、その他にスギ・ヒノキ植林、ヨシ群落等が分布している環境となっている。計画施設用地及びその周辺で、保全すべき種は確認されなかった。計画施設用地で確認された種はホンダタヌキ、ホンダテン、ホンダイタチの 3 種で、いずれも埼玉県内では低地帯から山地帯までの広範囲に生息する種であった。計画施設用地周辺でヒナコウモリやカヤネズミなどの 14 種が確認された。また、外来種としてアライグマが計画施設用地周辺で確認された。

表 9.7-5 確認種一覧（哺乳類）

No.	目と名 ^{注1)}	科と名 ^{注1)}	種と名 ^{注1)}	確認位置		調査季				保全すべき種	備考 ^{注4)}
				計画施設	周辺	秋季	冬季	春季	夏季		
1	モグラ目(食虫目)	モグラ科	アズマモグラ		●	●	●	●			
2	コウモリ目(翼手目)	ヒナコウモリ科	ヒナコウモリ		●	●					
3			ヒナコウモリ科A ^{注2)}		●	●			●		
ー			ヒナコウモリ科B ^{注3)}		●			●	●		
4	ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ		●			●			
5	ネズミ目(齧歯目)	ネズミ科	ホンダアカネズミ		●		●	●			
6			カヤネズミ		●	●					
7	ネコ目(食肉目)	アライグマ科	アライグマ		●	●		●	●		特外/緊急
8		イヌ科	ホンダタヌキ	●	●	●	●	●			
9			ホンドキツネ		●	●	●	●	●		
10		イタチ科	ホンダテン	●	●	●	●	●	●		
11			ホンダイタチ	●	●	●	●	●			
12			ニホンアナグマ		●			●	●		
13	ウシ目(偶蹄目)	イノシシ科	イノシシ		●	●	●	●	●		
14		シカ科	ニホンジカ		●	●	●	●	●		
ー	6目	9科	14種	3	14	11	8	12	8	0	ー

注1) 目と名、科と名、種と名の配列は原則として「令和3年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」（2021年8月、国土交通省）に従った。

注2) 種と名「ヒナコウモリ科A」は夜間調査（バッドディテクター）による確認である。47kHz～50kHzで確認されており、この周波数はヒナコウモリ科に属する多数の種が含まれるため、種の特定に至らなかった。なお、ヒナコウモリの周波数は25kHz前後であるため「ヒナコウモリ」と「ヒナコウモリ科A」は別種と考えられる。

注3) 種と名「ヒナコウモリ科B」は夜間調査（バッドディテクター）による確認である。22kHz～23kHzで確認されており、ヒナコウモリまたはヤマコウモリの可能性がある。

注4) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」（平成16年6月、法律第78号）による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成27年3月、環境省報道発表資料）に掲載のある外来生物等を掲げた。

「特外」：特定外来生物、「緊急」：総合対策外来種（緊急対策外来種）、

「重点」：総合対策外来種（重点対策外来種）、「他総合」：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）、

「産業」：産業管理外来種（適切な管理が必要な産業上重要な外来種）

(ウ) 鳥 類

7) 確認種（鳥類調査で確認された種：猛禽類も含む）

現地調査の結果、鳥類は表 9.7-6(1)及び(2)に示す 11 目 26 科 52 種が確認された（ラインセンサス法、ポイントセンサス法により確認された鳥類は資料編 p. 6-2～6-3 参照）。

計画施設用地は工場や道路などの舗装された環境の中に、小規模な芝地や路傍雑草、植樹帯が点在している環境で、計画施設用地周辺は、大半がコナラ群落であり、その他にスギ・ヒノキ植林、ヨシ群落等が分布している環境となっている。

計画施設用地で確認した種は、カワラバト、キジバト、ヒヨドリ及びスズメ等の一年を通じてみられる種に加えて、ツバメやジョウビタキなど渡りの時期にみられる種等 13 種であった。周辺では森林性の鳥としてコジュケイ、フクロウ、アカゲラ等が、水辺の鳥としてカモ類、カワウ等が確認された。

表 9.7-6(1) 確認種一覧（鳥類）

No.	目 和 名 ^{注1)}	科 和 名 ^{注1)}	種 和 名 ^{注1)}	確認位置		調査季						保全すべき種	備考 ^{注2)}
				計画施設	用地	周辺	秋季	冬季	春季	繁殖期	夏季		
1	キジ目	キジ科	コジュケイ			●	●	●	●	●	●		
2			キジ			●				●	●		
3	カモ目	カモ科	カルガモ			●			●	●			
4			オナガガモ			●		●					
5			コガモ			●		●					
6			ホシハジロ			●		●					
7			キンクロハジロ			●		●					
8	ハト目	ハト科	カワラバト(ドバト)	●		●							
9			キジバト	●	●	●	●	●	●	●	●		
10	カツオドリ目	ウ科	カワウ			●		●	●	●			
11	ペリカン目	サギ科	アオサギ			●		●	●				
12	ツル目	クイナ科	オオバン			●		●				※	
13	チドリ目	チドリ科	イカルチドリ			●	●					●	
14			コチドリ			●				●	●		
15	タカ目 ^{注4)}	タカ科	トビ			●	●		●	●	●	●	
16			サシバ			●			●			●	
17			ノスリ			●			●			●	
18	フクロウ目	フクロウ科	フクロウ			●		●				●	
19	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ			●	●	●	●	●	●		
20			アカゲラ			●	●						
21			アオゲラ			●			●	●	●		

注1) 目 和 名、科 和 名、種 和 名の配列は原則として「令 3 年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」（2021年 8 月、国土交通省）に従った。

注2) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」（平成16年 6 月、法律第78号）による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成27年 3 月、環境省報道発表資料）に掲載のある外来生物等を掲げた。

注3) オオバンの保全すべき種の欄の※は、繁殖鳥として対象となっている種が冬季のみで確認されたものであることを示している（種数に含めない）。

注4) 猛禽類調査（定点観察法）以外の鳥類調査で確認されたタカ目（トビ、サシバ、ノスリ）を掲載している。

表 9.7-6(2) 確認種一覧（鳥類）

No.	目 和 名 ^{注1)}	科 和 名 ^{注1)}	種 和 名 ^{注1)}	確認位置		調査季						保全すべき種	備考 ^{注2)}
				計 画 施 設	周 辺 地	秋 季	冬 季	春 季	繁 殖 期	夏 季			
22	スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ		●			●			●		
23		モズ科	モズ		●	●							
24		カラス科	カケス		●	●							
25			ハシボソガラス		●		●						
26			ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●				
27		シジュウカラ科	ヤマガラ		●	●	●	●	●	●	●		
28			シジュウカラ		●	●	●	●	●	●			
29		ヒバリ科	ヒバリ		●				●				
30		ツバメ科	ツバメ	●	●			●	●	●			
31			イワツバメ	●						●			
32		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	●	●	●	●	●	●	●			
33		ウグイス科	ウグイス		●		●	●	●	●			
34		エナガ科	エナガ		●	●	●	●	●	●			
35		チメドリ科	ガビチョウ	●	●	●	●	●	●	●		特外/重点	
36		メジロ科	メジロ	●	●	●	●	●	●	●			
37		ヒタキ科	トラツグミ		●		●				●		
38			シロハラ		●		●						
39			ツグミ		●		●						
40			ルリビタキ		●		●						
41			ジョウビタキ	●	●	●	●						
42			キビタキ		●			●	●	●	●		
43		スズメ科	スズメ	●	●	●	●	●	●	●			
44		セキレイ科	キセキレイ		●	●			●				
45			ハクセキレイ	●	●	●	●	●	●				
46		アトリ科	ベニマシコ		●		●				●		
47			シメ		●		●						
48			イカル	●	●	●	●	●	●				
49		ホオジロ科	ホオジロ	●	●	●	●	●	●	●	●		
50			カシラダカ		●		●						
51			アオジ		●	●	●						
52			クロジ		●	●					●		
—	11 目	26 科	52 種	13	50	24	33	25	25	21	12	—	

注1) 目和名、科和名、種和名の配列は原則として「令和3年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」（2021年8月、国土交通省）に従った。

注2) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」（平成16年6月、法律第78号）による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成27年3月、環境省報道発表資料）に掲載のある外来生物等を掲げた。

「特外」：特定外来生物、「緊急」：総合対策外来種（緊急対策外来種）、

「重点」：総合対策外来種（重点対策外来種）、「他総合」：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）、

「産業」：産業管理外来種（適切な管理が必要な産業上重要な外来種）

イ) 確認種（猛禽類調査で確認された種：猛禽類のみ）

現地調査の結果、猛禽類は表 9.7-7 に示す 2 目 2 科 8 種が確認された。

猛禽類は、計画施設用地で 4 種、計画施設用地周辺で 8 種類が確認された。計画施設用地ではトビ、ノスリ、チョウゲンボウ及びハヤブサが樹林で飛翔する個体や高空を通過する個体が確認されているものの、計画施設用地ではこれらの営巣は確認されていないことから周辺の樹林地からの通過中に確認されたものであると考えられる。

表 9.7-7 確認種一覧（猛禽類）

No.	目 和 名 ^{注1)}	科 和 名 ^{注1)}	種 和 名 ^{注1)}	確認位置		調査季 ^{注2)}				保全すべき種	備考 ^{注3)}
				計 画 地	周 辺	冬 季	春 季	繁 殖 期	夏 季		
1	タカ目	タカ科	ハチクマ		●		●		●	●	
2			トビ	●	●	●	●	●	●	●	
3			ハイタカ		●	●				●	
4			オオタカ		●	●			●	●	
5			サシバ		●		●	●		●	
6			ノスリ	●	●	●	●	●	●	●	
7	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	●	●	●				●	
8			ハヤブサ	●	●		●		●	●	
—	2目	2科	8種	4	8	5	5	3	5	8	—

注1) 目 and 名、科 and 名、種 and 名の配列は原則として「令和 3 年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」（2021 年 8 月、国土交通省）に従った。

注2) 1 月～3 月を冬季、4 月及び 5 月を春季、6 月及び 7 月を夏季として調査結果を掲載した。

注3) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」（平成 16 年 6 月、法律第 78 号）による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成 27 年 3 月、環境省報道発表資料）に掲載のある外来生物等を掲げた。

(エ) 爬虫類・両生類

7) 確認種

現地調査の結果、爬虫類・両生類は表 9.7-8、表 9.7-9 に示す 3 目 10 科 12 種が確認された。

計画施設用地の環境には爬虫類・両生類に適した樹林及び湿性環境がなく計画施設用地周辺で確認された種に比べ種類数が 2 種と少なかった。計画施設用地で確認されたヤマアカガエルは樹林地への移動中であつたと考えられる。また、ヒガシニホントカゲは石垣など隠れ場所や日光浴に適している環境があれば、都市部の住宅地でもみられるため、生息場の一部であると考えられる。計画施設用地周辺には爬虫類・両生類の生息に必要な樹林環境と湿性環境が存在することから 12 種と多くの種が確認された。

表 9.7-8 確認種一覧（爬虫類）

No.	目 和 名 ^{注1)}	科 和 名 ^{注1)}	種 和 名 ^{注1)}	確認位置		調査季				保全すべき種	備考 ^{注2)}
				計画地	周辺	秋季	早春季	春季	夏季		
1	有鱗目	トカゲ科	ヒガシニホントカゲ	●	●	●		●	●	●	
2		カナヘビ科	ニホンカナヘビ		●			●	●		
3		ナミヘビ科	アオダイショウ		●				●	●	
4			ヒバカリ		●	●				●	
5			ヤマカガシ		●				●	●	
6		クサリヘビ科	ニホンマムシ		●			●		●	
—	1 目	4 科	6 種	1	6	2	0	3	4	5	—

注1) 目 和 名、科 和 名、種 和 名の配列は原則として「令和 3 年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」（2021年 3 月、国土交通省）に従った。

注2) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」（平成16年 6 月、法律第78号）による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成27年 3 月、環境省報道発表資料）に掲載のある外来生物等を掲げた。

表 9.7-9 確認種一覧（両生類）

No.	目 和 名 ^{注1)}	科 和 名 ^{注1)}	種 和 名 ^{注1)}	確認位置		調査季				保全すべき種	備考 ^{注2)}
				計画用地設	周辺	秋季	早春季	春季	夏季		
1	有尾目	サンショウウオ科	トウキョウサンショウウオ		●		●	●	●	●	
2	無尾目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル		●				●	●	
3		アマガエル科	ニホンアマガエル		●	●		●	●		
4		アカガエル科	ヤマアカガエル	●	●		●	●	●	●	
5		ヌマガエル科	ヌマガエル		●		●		●		
6		アオガエル科	シュレーゲルアオガエル		●			●	●	●	
—	2 目	6 科	6 種	1	6	1	3	4	6	4	—

注1) 目 和 名、科 和 名、種 和 名の配列は原則として「令和 3 年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」（2021年 3 月、国土交通省）に従った。

注2) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」（平成16年 6 月、法律第78号）による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成27年 3 月、環境省報道発表資料）に掲載のある外来生物等を掲げた。

(オ) 魚 類

7) 確認種

現地調査の結果、魚類は表 9.7-10 に示すホトケドジョウ 1 目 1 科 1 種のみが、計画施設用地周辺の水路で確認された。

表 9.7-10 確認種一覧（魚類）

No.	目 和 名 ^{注1)}	科 和 名 ^{注1)}	種 和 名 ^{注1)}	確認位置		調査季			保全すべき種	備考 ^{注2)}
				計画地	周辺	秋季	春季	夏季		
1	コイ目	フクドジョウ科	ホトケドジョウ		●		●	●	●	
—	1 目	1 科	1 種	0	1	0	1	1	1	—

注1) 目 和 名、科 和 名、種 和 名の配列は原則として「令和 3 年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」（2021年 8 月、国土交通省）に従った。

注2) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」（平成16年 6 月、法律第78号）による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成27年 3 月、環境省報道発表資料）に掲載のある外来生物等を掲げた。

(カ) 底生動物

7) 確認種

現地調査の結果、底生動物としては表 9.7-11 に示す 17 目 36 科 53 種が確認された（定量採集法により確認された底生動物は資料編 p. 6-4 参照）。

計画施設用地内には水域が無く、すべての種が計画施設用地周辺で確認された。「水質がきれい」から「水質がややきれい」に生息するナミウズムシ、コオニヤンマから「水質がとても汚い」を指標するアメリカザリガニやユスリカ等が確認された。また、確認種の中には、保全すべき種として、ナミウズムシ、コシダカヒメモノアラガイ、ヒラマキミズマイマイ及びヘイケボタルの 4 種と、外来種であるアメリカザリガニ 1 種が確認された。

表 9.7-11 確認種一覧（底生動物）

No.	門和名 ^{注1)}	綱和名 ^{注1)}	目和名 ^{注1)}	科和名 ^{注1)}	種和名 ^{注1)}	確認位置		調査季		保全すべき種	備考 ^{注2)}		
						計画用地 施設	周辺	春季	夏季				
1	扁形動物門	有棒状体綱	三岐腸目	サンカクアタマウズムシ科	ナミウズムシ		●	●		●			
2	軟体動物門	腹足綱	汎有肺目	モノアラガイ科	コシダカヒメモノアラガイ		●	●	●	●			
3					ヒメモノアラガイ		●	●					
4				サカマキガイ科	サカマキガイ		●	●	●				
5				ヒラマキガイ科	ヒラマキミズマイマイ		●	●	●	●			
6		二枚貝綱	マルスダレガイ目	マメシジミ科	マメシジミ属		●	●	●				
7	環形動物門	ミズ綱	イトミミズ目	ヒメミズ科	ヒメミズ科		●	●					
8				ミズミズ科	ユリミズ		●	●					
-					ミズミズ科		●	●	●				
9			ツリミズ目	フトミズ科	フトミズ科		●	●	●				
10		ヒル綱	物蛭目	ヒラタビル科	ヌマビル		●	●	●				
11				物無蛭目	イシビル科	イシビル科		●	●	●			
12	節足動物門	軟甲綱	ワラジムシ目	ミズムシ科(甲)	ミズムシ(甲)		●	●	●				
13				エビ目	ヌマエビ科	シナヌマエビ		●	●	●			
-						カワリヌマエビ属		●	●	●			
14					アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ		●	●	●		緊急	
15		昆虫綱	カゲロウ目(蜉蝣目)	コカゲロウ科	フタバカゲロウ属		●		●				
16				トンボ目(蜻蛉目)	サナエトンボ科	コオニヤンマ		●		●			
17						オジロサナエ		●	●				
18					オニヤンマ科	オニヤンマ		●		●			
19					トンボ科	シオカラトンボ		●	●	●			
20				カワゲラ目(セキ翅目)	オナシカワゲラ科	オナシカワゲラ属		●	●	●			
21					カワゲラ科	フタツメカワゲラ属		●	●				
22				カメムシ目(半翅目)	アメンボ科	コセアカアメンボ		●	●	●			
23						ヤスマツアメンボ		●	●				
24						シマアメンボ		●		●			
-							アメンボ科		●		●		
25							マツモムシ科	マツモムシ		●	●		
26			ヘビトンボ目	センブリ科	ネグロセンブリ		●	●	●				
27			トビケラ目(毛翅目)	カクツツトビケラ科	カクツツトビケラ属		●	●	●				
28					エグリトビケラ科	エグリトビケラ科		●	●				
29			ハエ目(双翅目)	ヒメガガンボ科		ツヤヒメガガンボ属		●		●			
30						ホソヒメガガンボ属		●		●			
31				ガガンボ科		ガガンボ属		●		●			
32					コシボソガガンボ科	コシボソガガンボ属		●		●			
33				ユスリカ科		ユスリカ属		●	●	●			
34						ツヤユスリカ属		●		●			
35						ミズクサユスリカ属		●	●				
36						コブナシユスリカ属		●		●			
37						フユユスリカ属		●	●				
38						トゲヤマユスリカ属		●		●			
39						モンヌマユスリカ属		●	●				
40						カワリユスリカ属		●	●				
41						ハモンユスリカ属		●	●	●			
42						クロバヌマユスリカ属		●	●	●			
43						ナガレユスリカ属		●		●			
44						アシマダラユスリカ属		●		●			
45						ヒゲユスリカ属		●		●			
-						モンユスリカ亜科		●		●			
-						ユスリカ科		●	●	●			
46				ホソカ科	ニッポンホソカ		●		●				
47				ナガラエブ科	サツマモンナガラエブ		●	●					
48				ミズアブ科	Odontomyia属		●		●				
49				ミギワバエ科	ミギワバエ科		●	●					
50			コウチュウ目(鞘翅目)	ゲンゴロウ科	チビゲンゴロウ		●	●					
-					ゲンゴロウ科		●		●				
51				ガムシ科	キベリヒラタガムシ		●		●				
-						ヒラタガムシ属		●		●			
52				ナガハナノミ科	ヒゲナガハナノミ		●	●	●				
53			ホタル科	ヘイケボタル		●	●		●				
-	4門	7綱	17目	36科	53種	0	53	33	40	4	-		

注1) 目和名、科和名、種和名の配列は原則として「令和3年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」(2021年8月、国土交通省)に従った。

注2) 備考欄には、「特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律」(平成16年6月、法律第78号)による指定種、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」(平成27年3月、環境省報道発表資料)に掲載のある外来生物等を掲げた。

「特外」：特定外来生物、「緊急」：総合対策外来種(緊急対策外来種)、

「重点」：総合対策外来種(重点対策外来種)、「他総合」：総合対策外来種(その他の総合対策外来種)、

「産業」：産業管理外来種(適切な管理が必要な産業上重要な外来種)

(キ) 昆虫類

7) 確認種

現地調査の結果、昆虫類は表 9.7-12 に示す 18 目 213 科 984 種（科名までは同定できたものの、種名の確定ができてない 30 種を含む）が確認された（確認種一覧は資料編 p. 6-5～6-23 参照）。

目別の確認科数及び種数は、カメムシ目とコウチュウ目の昆虫が多くを占めている。環境別にみると、表 9.7-13 に示すとおり、計画施設用地は工場や道路が存在するも芝地や植栽帯があり、普通に市街地などでみられる種を多く含んでいる。一方、計画施設用地周辺には樹林環境や草地、湿地環境があり、それぞれに適応した昆虫類が多く生息している。

表 9.7-12 確認科数及び種数

No.	目名	科数	種数
1	カゲロウ目（蜉蝣目）	1	4
2	トンボ目（蜻蛉目）	6	18
3	ゴキブリ目（網翅目）	1	1
4	シロアリ目（等翅目）	1	1
5	カマキリ目（蟷螂目）	1	3
6	ハサミムシ目（革翅目）	3	5
7	カワゲラ目（セキ翅目）	2	2
8	バッタ目（直翅目）	11	27
9	ナナフシ目（竹節虫目）	1	1
10	カジリムシ目（嚙虫目）	7	8
11	カメムシ目（半翅目）	39	199
12	アミメカゲロウ目（脈翅目）	4	16
13	シリアゲムシ目（長翅目）	2	2
14	トビケラ目（毛翅目）	10	16
15	チョウ目（鱗翅目）	28	108
16	ハエ目（双翅目）	22	64
17	コウチュウ目（鞘翅目）	55	425
18	ハチ目（膜翅目）	19	84
	18 目	213 科	984 種

表 9.7-13 昆虫類の生息環境別の主な確認種

主な生息環境		主な確認種
計画施設用地 (210 種類)	工場や道路などの舗装された環境の中に、小規模な芝地や路傍雑草、植樹帯が点在している環境	ウスバキトンボ、アキアカネ、モリチャバネゴキブリ、オオカマキリ、ツユムシ、シバズ、ショウリョウバッタ、オンブバッタ、ベッコウハゴロモ、マルカメムシ、チャバネセセリ、ルリシジミ、モンキチョウ、シオヤアブ、ゴミムシ、オオヒラタシデムシ、アオドウガネ、ナナホシテントウ、ムネアカオオアリ、クロヤマアリ、セイヨウミツバチ等
調査範囲 (計画施設用地 除く) (906 種類)	コナラ群落等の樹林環境	セミ類、ミズイロオナガシジミ、テングチョウ、シャクガ類、ヤガ類、オオイシアブ、クロオサムシ、ジョウカイボン、キイロセマルキスイ、ルリボシカミキリ、ドロハマキチョッキリ、オオスズメバチ
	ヨシ群落などの湿地 水域環境	アサヒナカワトンボ、クロスジギンヤンマ、ヒメアメンボ、マツモムシ、ヒロバカゲロウ類、ヒゲナガトビケラ類、ミズアブ、ゲンゴロウ類、ガムシ類
	クズ・カナムグラ群落 ススキ等の草地環境	コロギス、セスジツユムシ、ショウリョウバッタモドキ、ツチイナゴ、ウチワゲンバイ、ホソヘリカメムシ、ダイミョウセセリ、ウラギンシジミ

② 保全すべき種の状況

表 9.7-1 に示した保全すべき種の選定基準に基づき、現地調査で確認した動物種から保全すべき種を選定した結果は、表 9.7-14 に示すとおりである。

鳥類 17 種、両生類 4 種、爬虫類 5 種、魚類 1 種、底生動物 4 種、昆虫類 15 種が選定された。保全すべき種の分布状況は図 9.7-2～図 9.7-8 に、保全すべき種の指定状況及び特徴は表 9.7-15～表 9.7-20 に、保全すべき種の確認状況は写真 9.7-1～写真 9.7-6、表 9.7-21 に示すとおりである。

表 9.7-14 保全すべき種一覧

No.	目 和 名 ^{注1)}	科 和 名 ^{注1)}	種 和 名 ^{注1)}	確認位置		調査季 ^{注2)}								選定基準 ^{注3)}			
						計 画 用 地 設	周 辺	秋 季	冬 季	早 春 季	春 季	繁 殖 季	初 夏 季	夏 季	⑤	⑥	
				繁殖鳥	越冬鳥												
鳥 類	チドリ目	チドリ科	イカルチドリ		●	●									NT1		
	タカ目	タカ科	ハチクマ		●				●			●	NT	DD			
			トビ	●	●		●		●	●		●		DD			
			ハイタカ		●		●					NT		NT2			
			オオタカ		●		●					●	NT	VU	NT		
			サシバ		●				●	●			VU	CR			
			ノスリ	●	●		●		●	●		●		DD	NT2		
	フクロウ目	フクロウ科	フクロウ		●		●						VU	NT2			
	スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ		●				●				VU	CR			
		シジュウカラ科	ヤマガラ		●	●	●		●	●		●		NT2			
		ヒタキ科	トラツグミ		●		●							VU			
			キビタキ		●				●	●		●		NT1			
		アトリ科	ベニマシコ		●		●									NT2	
		ホオジロ科	ホオジロ	●	●	●	●		●	●		●		NT2			
	クロジ			●	●										NT2		
ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	●	●		●							VU				
		ハヤブサ	●	●				●			●	VU		VU			
				5種	17種	4種	10種		9種	6種		8種	6種	13種	7種		
両 生 類	有尾目	サンショウウオ科	トウキョウサンショウウオ		●			●	●			●	VU		EN		
	無尾目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル		●							●			VU		
		アカガエル科	ヤマアカガエル	●	●			●	●			●		NT1			
		アオガエル科	シュレーゲルアオガエル		●				●			●		NT2			
	2目	4科	4種	1種	4種	0種		2種	3種			4種	1種	4種			
爬 虫 類	有鱗目	トカゲ科	ヒガシニホントカゲ	●	●	●			●			●		NT2			
		ナミヘビ科	アオダイショウ		●							●		NT2			
			ヒバカリ		●	●								NT2			
			ヤマカガシ		●							●		NT2			
	クサリヘビ科	ニホンマムシ		●				●					NT2				
1目	3科	5種	1種	5種	2種		0種	2種			3種	0種	5種				
魚 類	コイ目	フクドジョウ科	ホトケドジョウ		●				●			●	EN	CR			
	1目	1科	1種	0種	1種	0種			1種			1種	1種	1種			
底 生 動 物	三岐腸目	サンカクアタマウズ	ナミウズムシ		●				●					LP			
	汎有肺目	モノアラガイ科	コシダカヒメモノアラガイ		●				●			●	DD				
		ヒラマキガイ科	ヒラマキミズマイマイ		●				●			●	DD		DD		
	コウチュウ目(鞘翅目)	ホタル科	ヘイケボタル		●				●					NT1			
	3目	4科	4種	0種	4種				4種			2種	2種	3種			
昆 虫 類	トンボ目(蜻蛉目)	トンボ科	ハラビロトンボ		●				●		●	●		NT2			
			ヒメアカネ		●	●								VU			
	ハサミムシ目(革翅目)	クギヌキハサミムシ	エゾハサミムシ		●							●		LP			
		バッタ科	ヒナバッタ	●	●						●			(NT1)			
			ショウリョウバッタモドキ		●	●								NT2			
	カメムシ目(半翅目)	マキバサシガメ科	ベニモンマキバサシガメ		●							●		NT2			
		ヘリカメムシ科	ヒメトゲヘリカメムシ		●	●			●		●			NT1			
		カメムシ科	イネクロカメムシ		●							●		NT2			
	アミメカゲロウ目(脈翅目)	ツノトンボ科	キバネツノトンボ		●				●		●			CR			
	トビケラ目(毛翅目)	ホソバトビケラ科	ホソバトビケラ		●	●								NT1			
	チョウ目(鱗翅目)	コブガ科	トビイロリンガ		●	●								DD			
	コウチュウ目(鞘翅目)	ゲンゴロウ科	クロズマメゲンゴロウ		●				●					(VU)			
		ガムシ科	コガムシ		●							●	DD				
		ホタル科	ヘイケボタル		●							●		NT1			
	ハチ目(膜翅目)	クモバチ科	アオスジクモバチ		●							●	DD	LP			
8目	13科	15種	1種	15種	5種	0種		4種		4種	7種	2種	14種				

注1) 目と名、科と名、種と名の配列は原則として「令和3年度 河川水辺の国勢調査 生物リスト」(2021年8月、国土交通省)に従った。

注2) 猛禽類は1月～7月に定点調査を行ったが、表中では1月～3月を冬季、4月及び5月を春季、6月及び7月を夏季として調査結果を掲載した。

注3) 保全すべき種の選定基準及びランクは以下の通りである。なお、表9.7-1に示した保全すべき種の選定基準のうち、①～④は該当する種が確認されていないことから、本表では省略した。

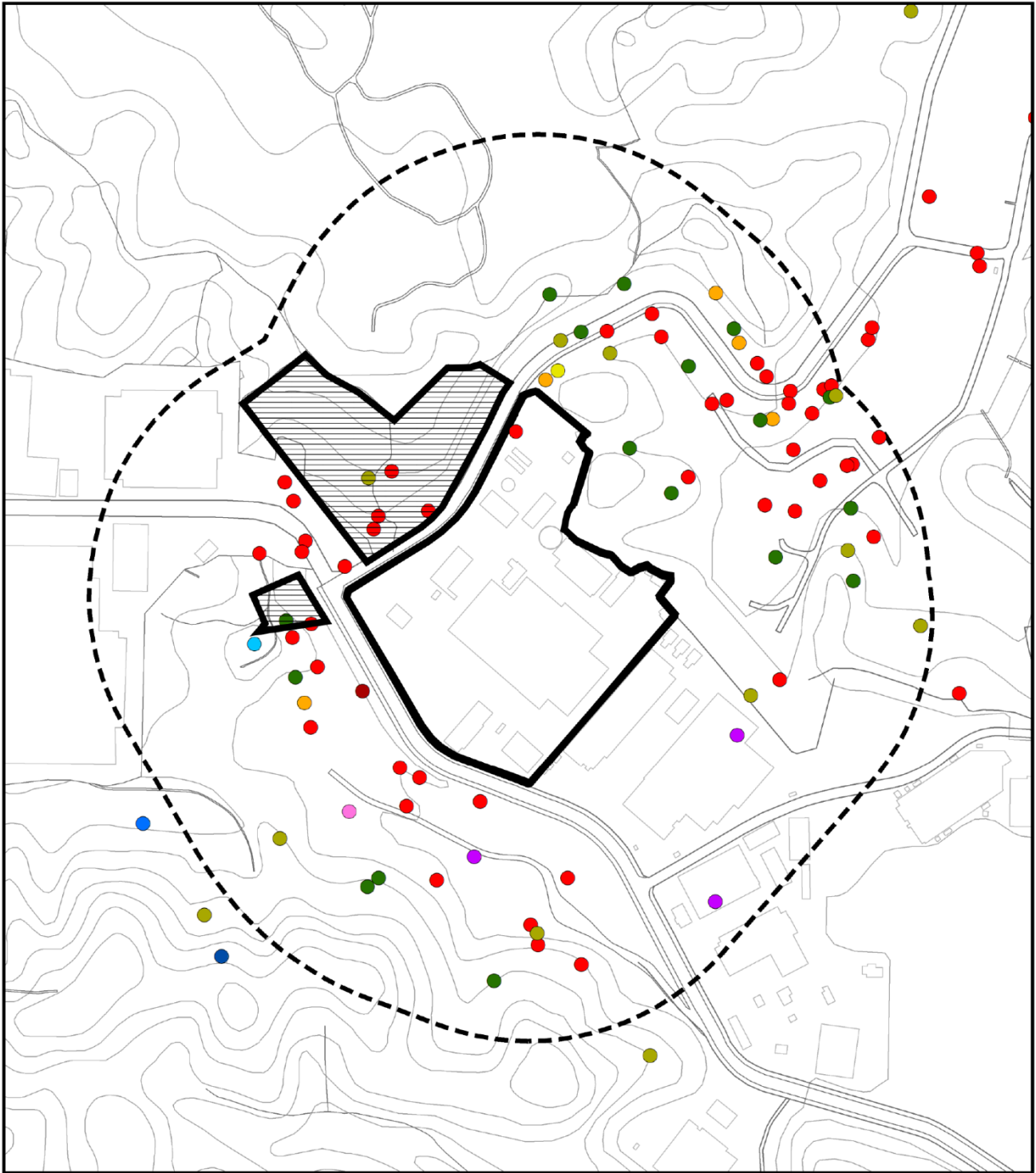
⑤「環境省レッドリスト2020」(令和2年3月、環境省)に記載されている種

⑥「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」(2018年、埼玉県)に記載されている種

注4) 選定基準欄の略称は、以下のとおりである。

環境省カテゴリー Ex: 絶滅、Ew: 野生絶滅、CR: 絶滅危惧ⅠA類、EN: 絶滅危惧ⅠB類、VU: 絶滅危惧Ⅱ類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、LP: 絶滅のおそれのある地域個体群

埼玉県カテゴリー Ex: 絶滅、Ew: 野生絶滅、CR: 絶滅危惧ⅠA類、EN: 絶滅危惧ⅠB類、VU: 絶滅危惧Ⅱ類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、LP: 絶滅のおそれのある地域個体群、RT: 地帯別危惧



この地図は「基盤地図情報ダウンロードサービス」(国土地理院)を使用して作成したものである。

凡 例

- 計画地
- 調査範囲
- 緩衝緑地

- イカルチドリ
- トビ
- サシバ
- ノスリ
- フクロウ
- ヤマガラ

- トラツグミ
- キビタキ
- ベニマシコ
- ホオジロ
- クロジ

注: サンショウクイは図の範囲外で確認された為、凡例には記載していない。

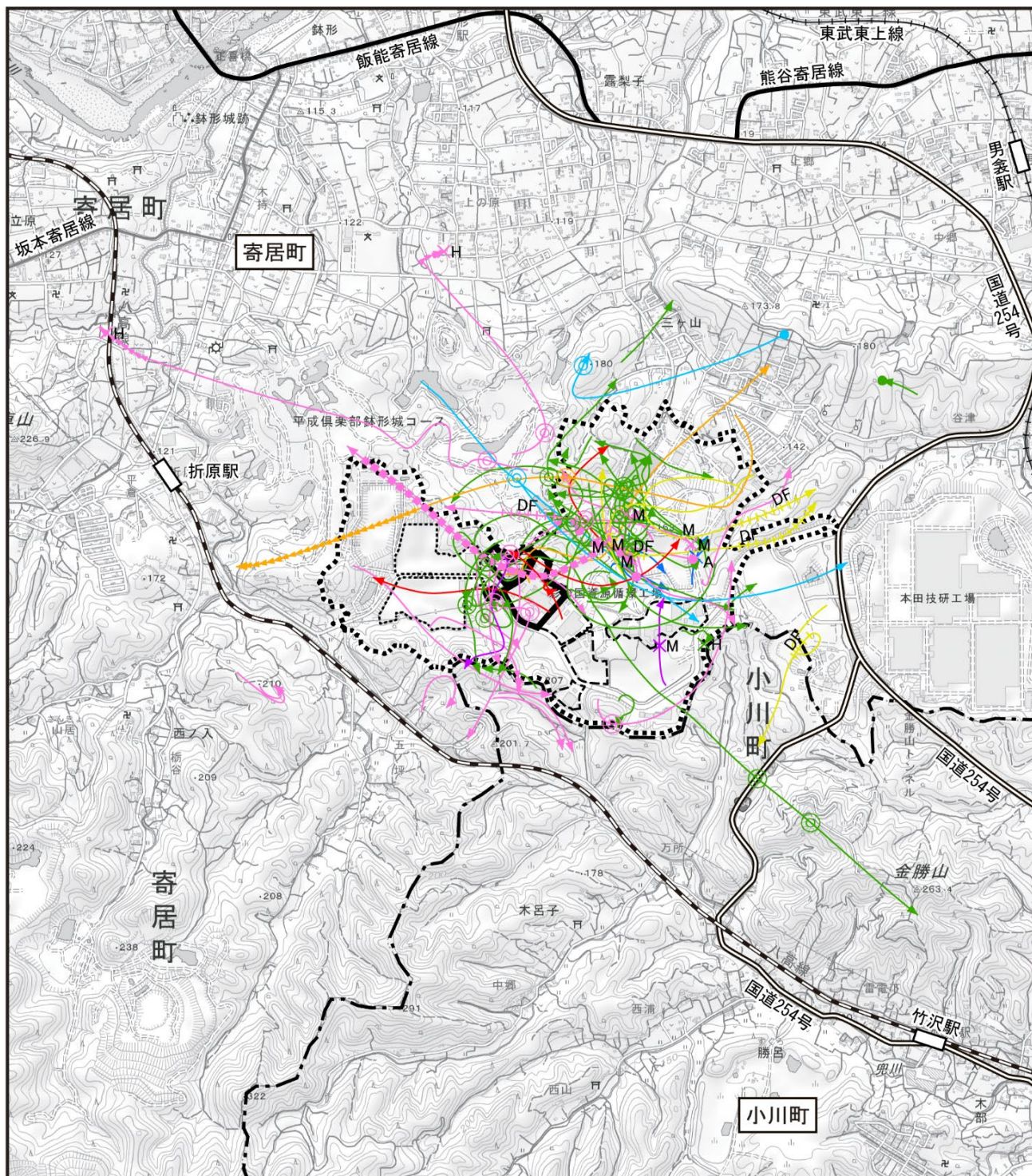
N



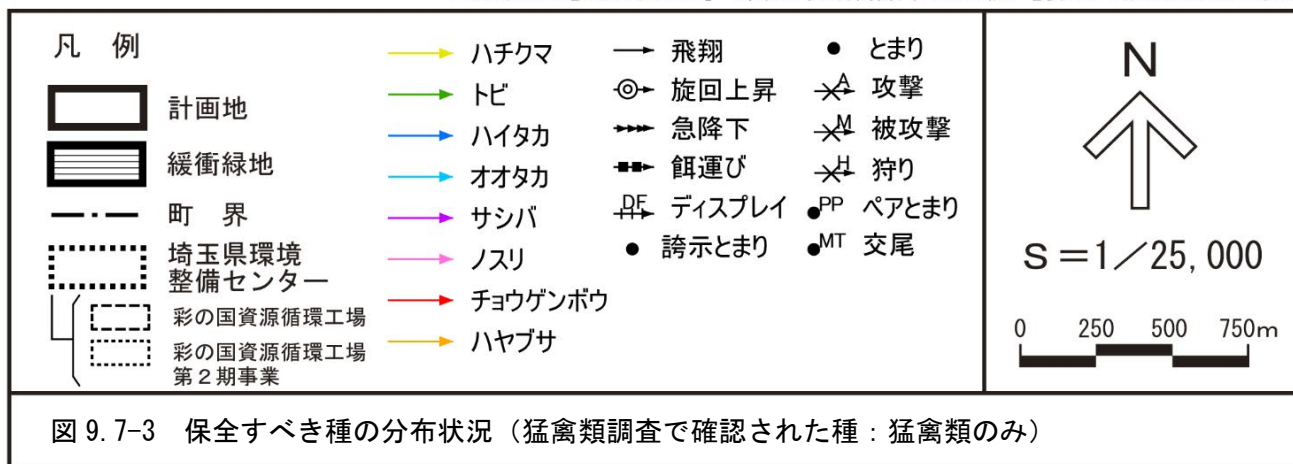
S=1/5,000

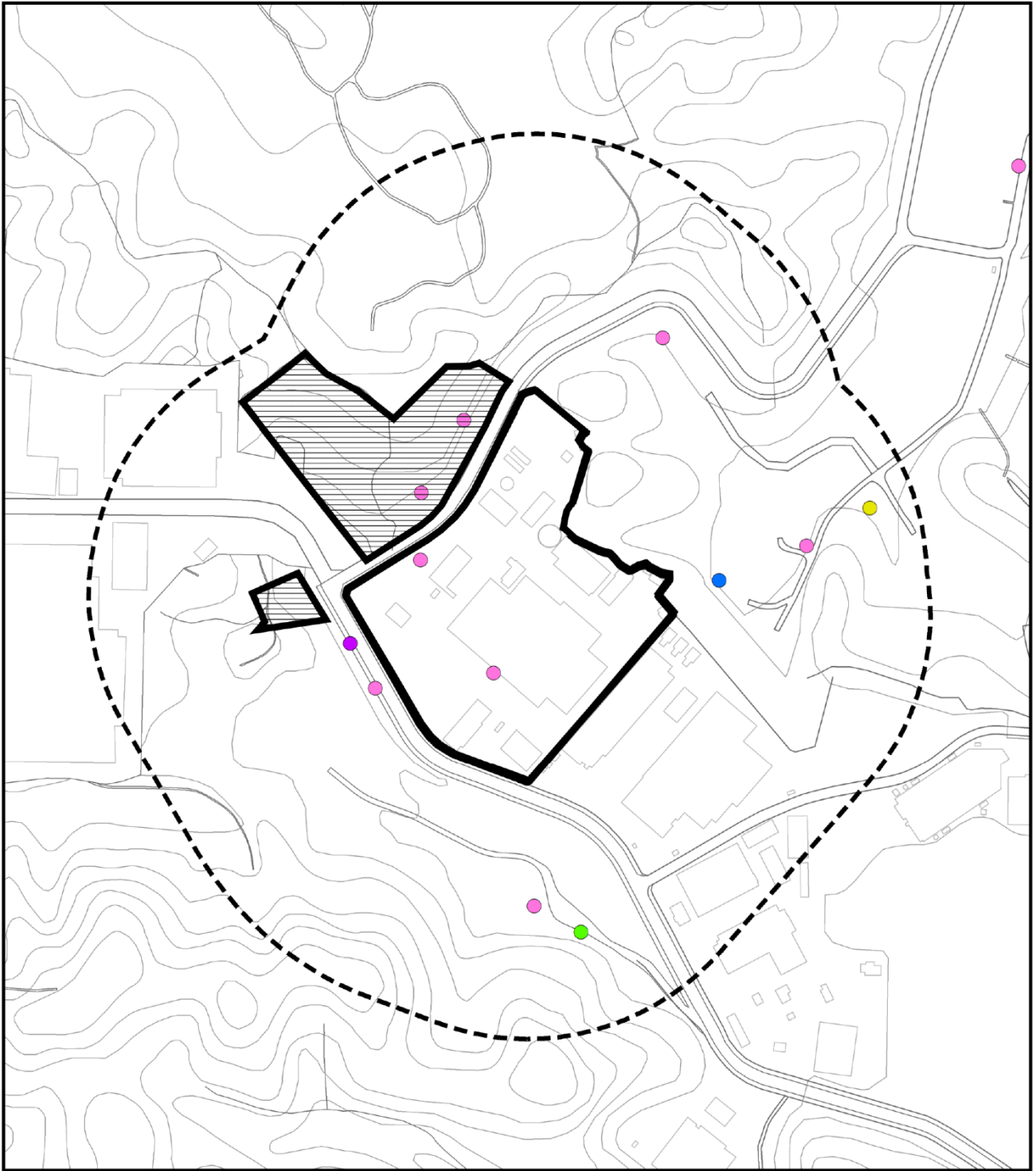
0 50 100 150 m

図 9.7-2 保全すべき種の分布状況 (鳥類調査で確認された種: 猛禽類も含む)



この地図は「電子地形図25000」（令和2年2月調製、国土地理院）を使用して作成したものである。





この地図は「基盤地図情報ダウンロードサービス」(国土地理院)を使用して作成したものである。

凡 例

- | | | | |
|---|------|---|-----------|
|  | 計画地 |  | ヒガシニホントカゲ |
|  | 調査範囲 |  | アオダイショウ |
|  | 緩衝緑地 |  | ヒバカリ |
| | |  | ヤマカガシ |
| | |  | ニホンマムシ |

N

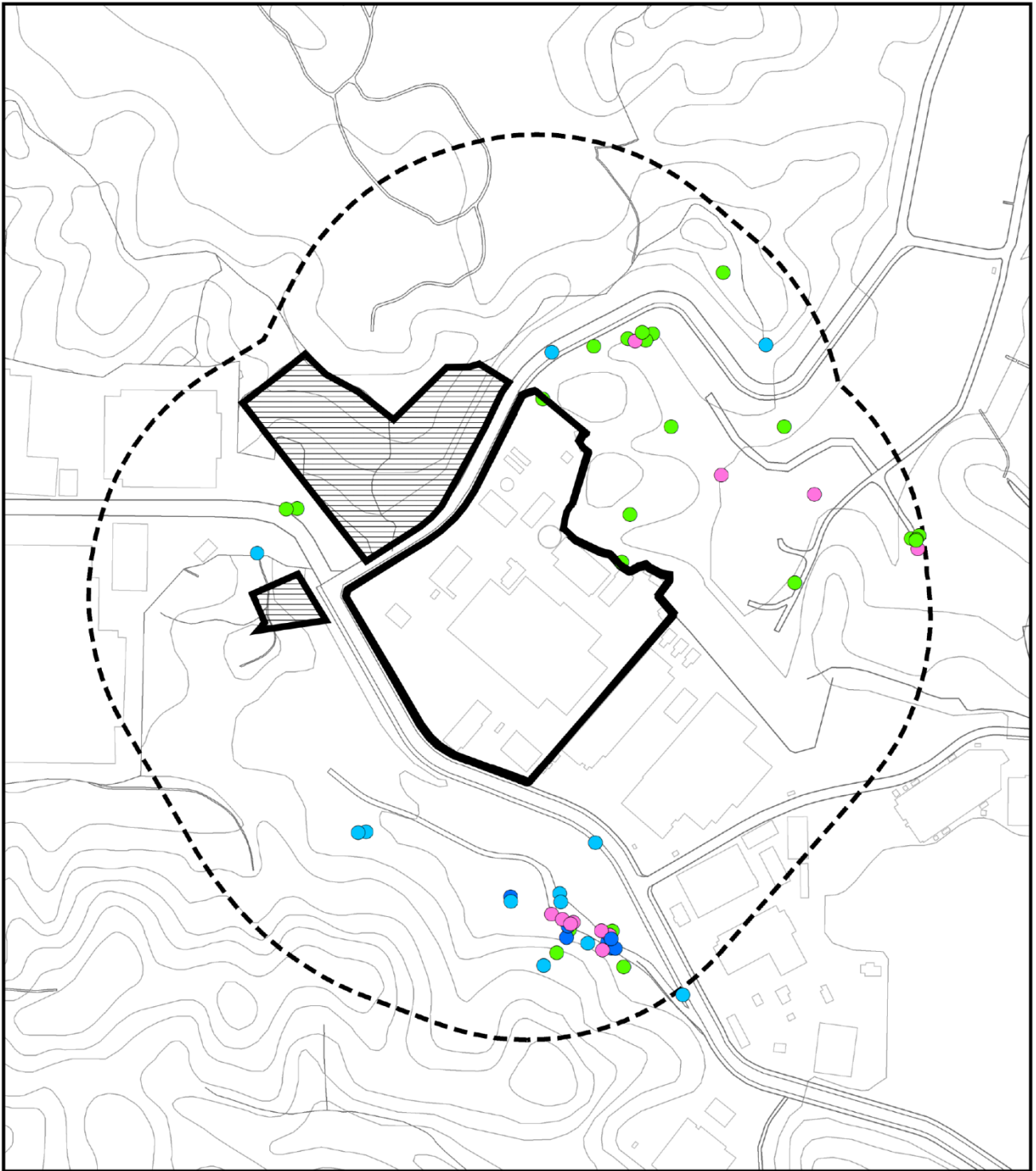


S=1/5,000

0 50 100 150 m



図 9.7-4 保全すべき種の分布状況 (爬虫類)



この地図は「基盤地図情報ダウンロードサービス」(国土地理院)を使用して作成したものである。

凡 例

- | | | | |
|---|------|---|--------------|
|  | 計画地 |  | トウキョウサンショウウオ |
|  | 調査範囲 |  | アズマヒキガエル |
|  | 緩衝緑地 |  | ヤマアカガエル |
| | |  | シュレーゲルアオガエル |

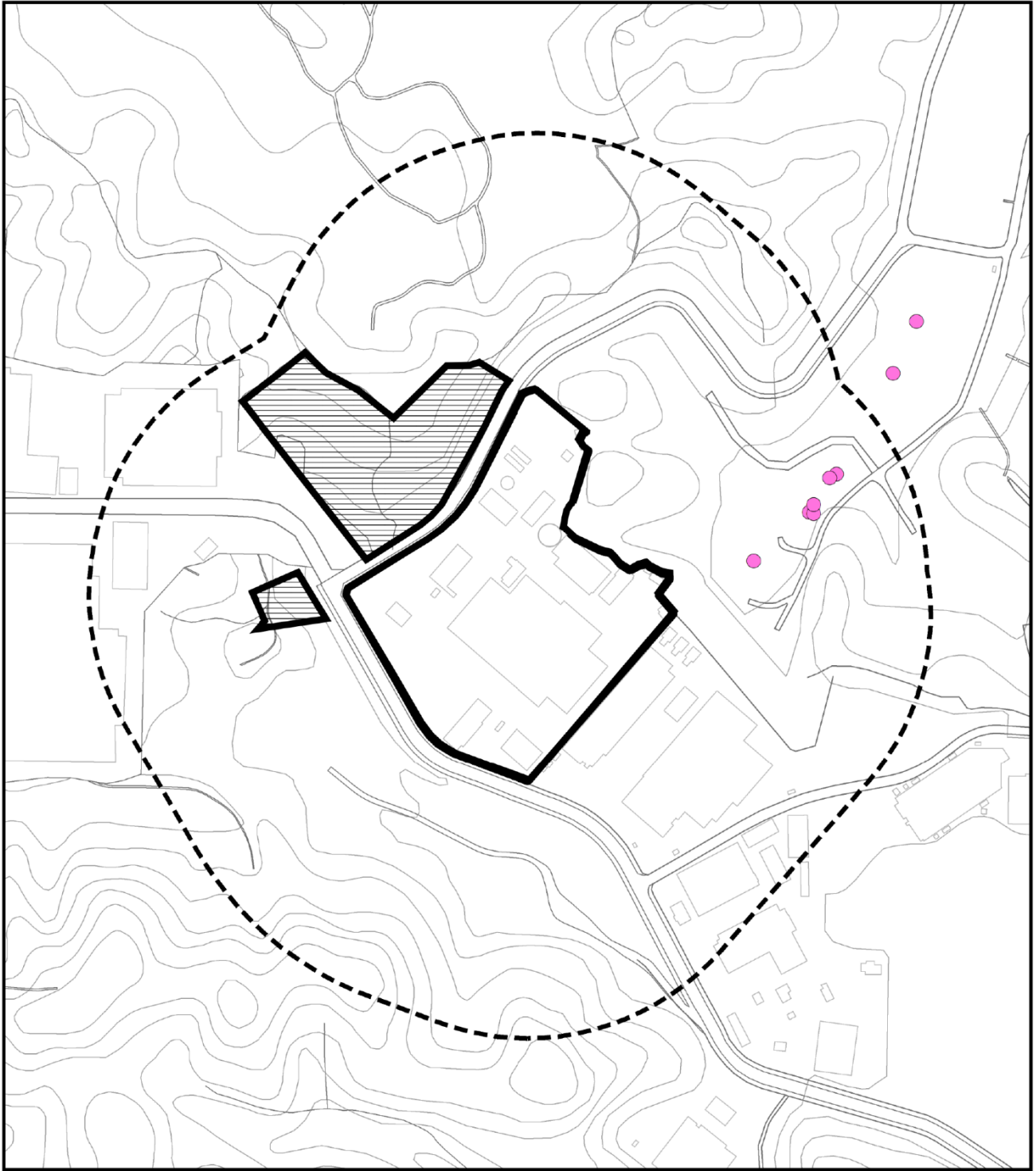
N



S=1/5,000

0 50 100 150 m

図 9.7-5 保全すべき種の分布状況 (両生類)



この地図は「基盤地図情報ダウンロードサービス」(国土地理院)を使用して作成したものである。

凡 例



計画地
調査範囲
緩衝緑地

● ホトケドジョウ

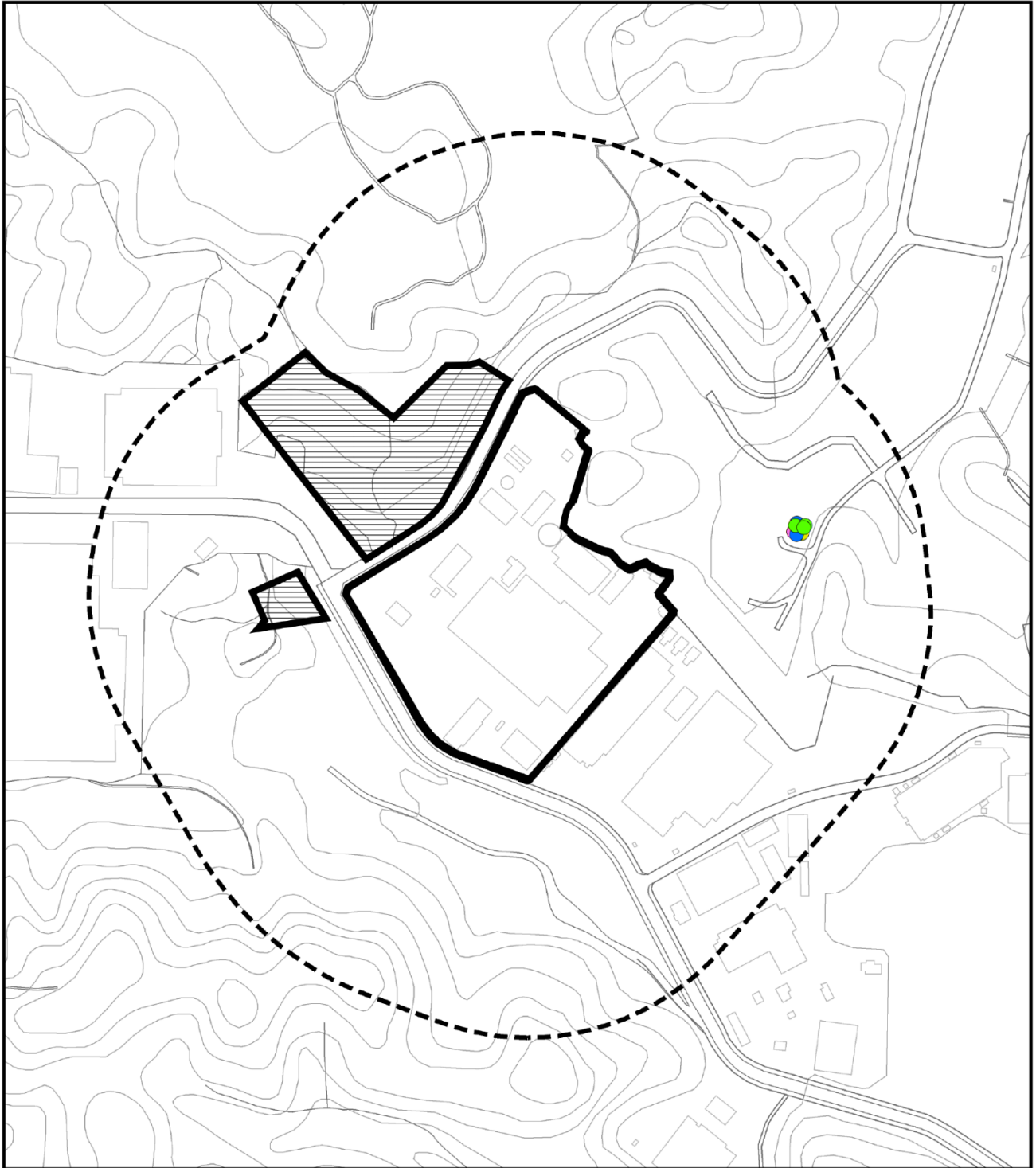
N



S=1/5,000

0 50 100 150 m

図 9.7-6 保全すべき種の分布状況 (魚類)



この地図は「基盤地図情報ダウンロードサービス」(国土地理院)を使用して作成したものである。

凡 例

- | | | | |
|---|------|---|--------------|
|  | 計画地 |  | ナミウズムシ |
|  | 調査範囲 |  | コンダカヒメモノアラガイ |
|  | 緩衝緑地 |  | ヒラマキミズマイマイ |
| | |  | ヘイケボタル |

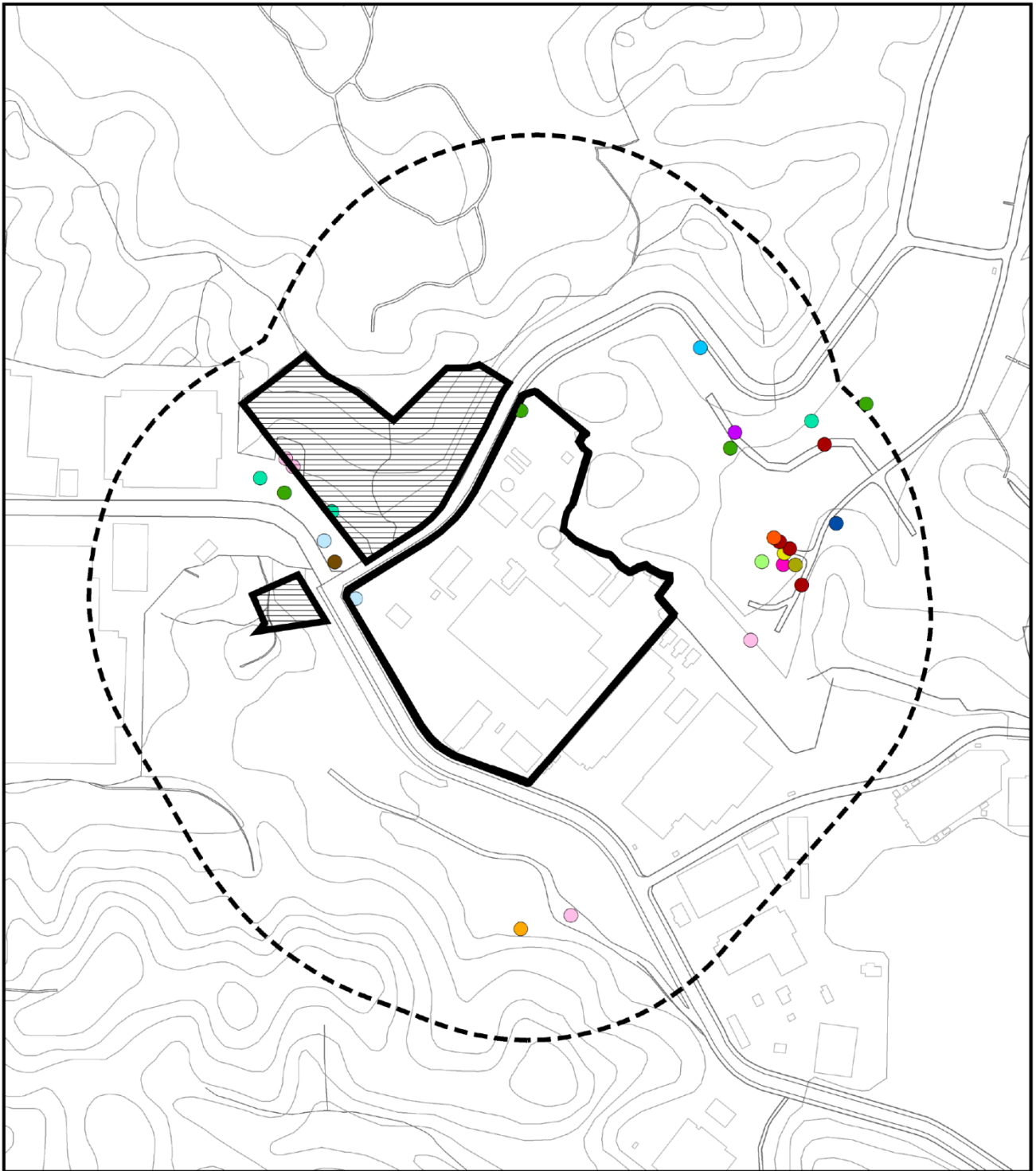
N



S=1/5,000

0 50 100 150 m

図 9.7-7 保全すべき種の分布状況 (底生動物)



この地図は「基盤地図情報ダウンロードサービス」(国土地理院)を使用して作成したものである。

凡 例



計画地

調査範囲

緩衝緑地

ハラボロトンボ

ヒメアカネ

エゾハサミムシ

ヒナバッタ

ショウリョウバッタモドキ

ベニモンマキバサシガメ

ヒメトゲヘリカメムシ

イネクロカメムシ

キバネツノトンボ

ホソバトビケラ

トビロリンガ

クロズマメゲンゴロウ

コガムシ

ヘイケボタル

アオスジクモバチ

N



S=1/5,000

0 50 100 150 m

図 9.7-8 保全すべき種の分布状況 (昆虫類)

表 9. 7-15(1) 保全すべき種の指定状況及び特徴（鳥類）

科名	チドリ
種名	イカルチドリ
≪指定状況≫ 環境省 RL：一 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 九州以北では留鳥、北海道では夏鳥（一部留鳥）、南西諸島では冬鳥。	
≪生息環境≫ 砂礫地のある河川や湖沼で繁殖する。河川では上流から中流域に生息する。繁殖期以外 の季節には休耕田や下流域にも出現するが、海岸や干潟に出ることは少ない。	
科名	タカ
種名	ハチクマ
≪指定状況≫ 環境省 RL：一 埼玉県 RL：EN	
≪特徴≫ 夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来し繁殖する。 低山から平地の林に生息する。昆虫、ヘビ、カエル、鳥類などを捕食するが、特に、クロスズメバチなどのハチ類を好んで捕食する。	
≪生息環境≫ 丘陵帯、低山帯、山地帯の各地に夏鳥として渡来し繁殖していたが、現在、県内での繁殖情報が極めて少なくなっている。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地で記録される。	
科名	タカ
種名	トビ
≪指定状況≫ 環境省 RL：一 埼玉県 RL：DD	
≪特徴≫ 留鳥として九州以北に普通に生息する。	
≪生息環境≫ 平地から高山にかけて市街地、海岸、湖沼など幅広い場所で見られる。	
科名	タカ
種名	ハイタカ
≪指定状況≫ 環境省 RL：NT 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 北海道と本州の一部で繁殖し、冬季は全国に冬鳥として渡来する。 ツミよりやや標高の高い山地の林で繁殖し、冬季は平地から山地の林、農耕地、河川敷などに生息する。	
≪生息環境≫ 冬季は平地の林、農耕地、河川敷などに生息するが個体数は多くない。現在はやや増加傾向にある。県内でも夏季に山地に生息するが、繁殖の状況についてはよくわかっていない。春秋の渡りの時期には通過と思われる個体が県内各地で記録される。	
科名	タカ
種名	オオタカ
≪指定状況≫ 環境省 RL：NT 埼玉県 RL：VU	
≪特徴≫ 留鳥として北海道、本州、四国、九州に分布し、南西諸島では冬鳥。 平地から山地の林や農耕地などに生息する。現在は市街地のさほど大きくない林で営巣するものもいる。	
≪生息環境≫ 留鳥として平地から山地の林や農耕地、河川敷などに生息する。かつて、低地帯では冬季でも生息数が少なかったが、現在は低地帯の社寺林や屋敷林などで営巣するものが増えている。個体数は増加傾向にあるようだが、生息地の環境は必ずしも良くなっていない。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）

表 9.7-15(2) 保全すべき種の指定状況及び特徴（鳥類）

科名	タカ
種名	サシバ
≪指定状況≫ 環境省 RL：VU 埼玉県 RL：CR	
≪特徴≫ 夏鳥として、本州、四国、九州に渡来する。南西諸島では越冬するものもある。	
≪生息環境≫ 低山の林で繁殖し、林縁や農耕地、山林などでカエル、トカゲ、ヘビ、ネズミ、鳥類などを捕食する。	
科名	タカ
種名	ノスリ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 四国以北で繁殖し、留鳥または漂鳥。	
≪生息環境≫ 山地の森林や岩壁で繁殖するが、低地での繁殖確認が増えている。冬は農耕地、河川敷などの見通しのよい場所で見られる。	
科名	フクロウ
種名	フクロウ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 九州以北で繁殖する留鳥。	
≪生息環境≫ 平地から山地の林に棲み大木の樹洞に営巣するが、オオタカの古巣や農家の納屋に産卵することもある。夜行性のため不明な点も多い。県内の低地帯から亜高山帯で幅広く繁殖している。冬は低地へ漂行するものもいる。	
科名	サンショウクイ
種名	サンショウクイ
≪指定状況≫ 環境省 RL：VU 埼玉県 RL：EN	
≪特徴≫ 夏鳥として渡来し、本州以南の低地から山地帯の落葉広葉樹林で繁殖する。	
≪生息環境≫ 標高の低い山地や山麓の大きな落葉樹のある林に生息する。巣は大木の地上から数m以上の横枝につく。樹上で昆虫などを捕り、高い枯れ枝や梢に直立した姿勢でとまる。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）

表 9. 7-15 (3) 保全すべき種の指定状況及び特徴（鳥類）

科名	シジュウカラ
種名	ヤマガラ
≪指定状況≫ 環境省 RL：－ 埼玉県 RL：RT	
≪特徴≫ 留鳥または漂鳥として、北海道、本州、四国、九州、及び小笠原諸島を除く島嶼に分布する。	
≪生息環境≫ 平地から山地の林に生息する。県内では丘陵帯から山地帯の森林に生息し繁殖する。冬季に好物のエゴノキの実を探している姿がよく見られる。	
科名	ヒタキ
種名	トラツグミ
≪指定状況≫ 環境省 RL：－ 埼玉県 RL：RT	
≪特徴≫ 夏鳥としてほぼ全国に渡来する。	
≪生息環境≫ 本種は平地から山地のよく繁った落葉広葉樹林や常緑広葉樹林に生息、繁殖する。1960 年代の燃料革命以後、雑木林の萌芽更新が行われなくなり、林が成熟してきたため、樹の間の空間で昆虫を捕らえる本種の生息にとって好適な環境が増えてきた。	
科名	ヒタキ
種名	キビタキ
≪指定状況≫ 環境省 RL：－ 埼玉県 RL：RT	
≪特徴≫ 夏鳥としてほぼ全国に渡来する。	
≪生息環境≫ 本種は平地から山地のよく繁った落葉広葉樹林や常緑広葉樹林に生息、繁殖する。1960 年代の燃料革命以後、雑木林の萌芽更新が行われなくなり、林が成熟してきたため、樹の間の空間で昆虫を捕らえる本種の生息にとって好適な環境が増えてきた。	
科名	アトリ
種名	ベニマシコ
≪指定状況≫ 環境省 RL：－ 埼玉県 RL：RT	
≪特徴≫ 主に北海道で繁殖し、冬は本州以南に渡る。北海道・青森（繁殖）、本州、四国、九州。	
≪生息環境≫ 繁殖期には平地の低木のある草原、川に沿った低木林、林縁などにすみ、ハマナス、ニワトコなどの低木の枝に営巣する。越冬時には低地から山地の低木の茂みや山麓・丘陵地に近い河川のヨシ原などにすむ。	
科名	ホオジロ
種名	ホオジロ
≪指定状況≫ 環境省 RL：－ 埼玉県 RL：RT	
≪特徴≫ 九州以北で繁殖し、冬季には暖地へ移動する留鳥あるいは漂鳥。	
≪生息環境≫ 林縁の藪、植木畑周辺、河川敷の灌木等で繁殖するが、低地帯で繁殖に適する環境が減少している。冬は河川敷等で草本類の種子を採食しているところがよく見られる。県内では低地帯から山地帯まで留鳥として広く分布する	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）

表 9. 7-15 (4) 保全すべき種の指定状況及び特徴（鳥類）

科名	ホオジロ
種名	クロジ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：RT	
≪特徴≫ 留鳥または漂鳥として北海道から本州中部で繁殖し、冬季は本州中部以南に移動する。	
≪生息環境≫ 夏季は亜高山帯のササなどの下層植生の豊かな樹林地で繁殖し、冬季は平地から山地の林などで越冬する。北海道では平地林でも繁殖する。春秋の渡り期には観察記録がやや多くなる。時には、人家の庭に姿を見せることがある。	
科名	ハヤブサ
種名	チョウゲンボウ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 留鳥として全国に分布し、本州で繁殖する。 本来の営巣地は絶壁等のくぼみである。採食環境として原野や草地等の開けた場所を好む。 畑地などの上空でホバリングしながら獲物を狙う姿をよく見かける。主食はネズミ、昆虫類だが、自分と同じ大きさのキジバトを捕らえることもある。	
≪生息環境≫ 1980 年代頃より、低地帯の高架橋や取水塔のような人工建造物に営巣するようになり市街地でもよく見られるようになった。さいたま市内のビルではかなり以前から繁殖しているのが知られている。冬季は河川敷や農耕地、草地等の開けた場所でよく見られる。	
科名	ハヤブサ
種名	ハヤブサ
≪指定状況≫ 環境省 RL：VU 埼玉県 RL：YU	
≪特徴≫ 留鳥として、北海道から九州で繁殖し、冬季は冬鳥として全国に渡来する。 平地から山地の海岸、河口、河川敷、湖沼、農耕地などに生息する。元来、海岸の断崖や岸壁の岩棚などで繁殖していたが、現在は市街地のビルや橋脚など人工構造物に営巣する例が増加している。低地では鉄塔などの高い所にとまっているところが見られる。餌を発見すると飛び出していき、捕まえた獲物を元の場所に運んで食べることが多い。	
≪生息環境≫ 県内には冬鳥として渡来し、平地から山地の河川敷、農耕地、湖沼、ダム湖などに生息する。現在はやや増加傾向にあり、夏季の観察記録もある。県内でも人工構造物に営巣し、繁殖する兆候がある。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）



イカルチドリ



トビ



ノスリ



ヤマガラ



ベニシマコ



ホオジロ

写真 9. 7-1 鳥類確認状況

表 9. 7-16 保全すべき種の指定状況及び特徴（爬虫類）

科名	トカゲ
種名	ヒガシニホントカゲ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 北海道、本州（東海、北陸以東）	
≪生息環境≫ 低地から山地まで広範囲に生息し、林地から開けている林道沿いや、川辺などの日当たりが良い場所に昼間みられる。寺社の石垣など隠れ場所や日光浴に適している環境があれば、都市部の住宅地でもみられる。	
科名	ナミヘビ
種名	アオダイショウ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 低地から山地まで広く生息し、森林、水田、住宅地まで様々な環境に適応している。樹上性が強く、鳥類のヒナや卵、ネズミ類を好み、幼蛇はカエルやトカゲを餌とするため、これら餌資源が豊富な里山環境は生息適地といえる。	
科名	ナミヘビ
種名	ヒバカリ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 低地から山地まで広く生息している。水辺をよく好み、水田、畑地、湿地、池沼の周辺などでみられる。餌としてカエル、ミミズ、魚類を好むが、カエルに依存する傾向が強い。夕方から早朝にかけて活動し、小型で地味な体色のため、人目にふれにくい種である。	
科名	ナミヘビ
種名	ヤマカガシ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 低地帯から山地帯まで広く生息している。分布の中心は水田や雑木林の多い台地・丘陵帯で、河川敷でもよくみかける。餌資源をカエル類に依存するため、水田の減少は個体数の減少に直結し、特に低地帯では生息適地の局所化が顕著な県南部、東部で稀である。	
科名	クサリヘビ
種名	ニホンマムシ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 低地から山地まで広く生息し、森林とその周辺の水田、湿地、池沼、河川敷から人家近くまで多様な環境でみられる。餌はネズミやカエル類をはじめ、小型の脊椎動物を食べる。主に夜行性であるが、日光浴など昼間活動することもあるため、身近な環境でもみられる。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）



ヒガシニホントカゲ



アオダイショウ



ヒバカリ



ヤマガカシ



ニホンマムシ

写真 9.7-2 爬虫類確認状況

表 9.7-17 保全すべき種の指定状況及び特徴（両生類）

科名	サンショウウオ
種名	トウキョウサンショウウオ
≪指定状況≫ 環境省 RL：VU 埼玉県 RL：EN	
≪特徴≫ 本州（群馬県を除く関東、福島県南部）	
≪生息環境≫ 低山や丘陵地の雑木林などに生息し、谷戸に散在する水田やその水路、地下水が出ている水たまりなどに2～4月ごろ産卵する。幼生は水田や流れの緩い水路などに生息し、上陸後は落ち葉などが溜まった林床などで生活するため、隠蔽性が強くめったに人の目に触れることはない。	
科名	ヒキガエル
種名	アズマヒキガエル
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 北海道（※）、本州（近畿以東） ※北海道の個体群は国内移入とされる	
≪生息環境≫ 山地から平地まで幅広く分布し、おもに林床で生息している。山地の樹林帯から都市公園や人家近くの緑地でも確認され、様々な環境に適応している。産卵は3～5月頃に水深の浅い池沼などでおこなわれ、長いひも状の卵塊を産む。産卵期以外は水辺から離れた場所でも確認される。	
科名	アカガエル
種名	ヤマアカガエル
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 丘陵地の人家に近い里山から、山地の森林奥深くまで林床や溪流の周りに生息している。産卵期は地域や標高などによって差があり、埼玉県内ではだいたい2～4月頃である。山林に隣接した湿地、湿地、浅い池沼、小さな水たまりなどが産卵に使われる。	
科名	アオガエル
種名	シュレーゲルアオガエル
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT（準絶滅危惧）	
≪特徴≫ 本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 低山から丘陵地にかけて雑木林などに生息している。3～5月頃に雑木林など生息地に隣接した水田の畦や湿地に泡状の卵塊を産む。主たる産卵場所である水田と雑木林などの生息地双方の場所が必要であり、里山環境に適応した種である。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）



トウキョウサンショウウオ



アズマヒキガエル



ヤマアカガエル



シュレーゲルアオガエル

写真 9.7-3 両性類確認状況

表 9.7-18 保全すべき種の指定状況及び特徴（魚類）

科名	フクドジョウ
種名	ホトケドジョウ
《指定状況》 環境省 RL：EN 埼玉県 RL：CR	
《特徴》 本州（青森県を除く東北地方～三重県・京都府・兵庫県）	
《生息環境》 河川の中流域に主に生息する。小河川の源流付近や湧水が残り、サワガニの生息や、水生植物が自生するような水域が適している。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）



ホトケドジョウ

写真 9.7-4 魚類確認状況

表 9.7-19 保全すべき種の指定状況及び特徴（底生動物）

科名	サンカクアタマウズムシ
種名	ナミウズムシ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：LP	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 本州（関東地方）では低地帯から山地帯にかけて広く分布し、水質の BOD 値が 3ppm 以下の清水環境下に生息し、湧水や河川の源流付近、清流の波立つ瀬の部分に見られる。	
科名	モノアラガイ
種名	コシダカヒメモノアラガイ
≪指定状況≫ 環境省 RL：DD 埼玉県 RL：—	
≪特徴≫ 日本各地に分布	
≪生息環境≫ 水田の畦や用水路、河川などの止水的環境に生息する。	
科名	ヒラマキガイ
種名	ヒラマキミズマイマイ
≪指定状況≫ 環境省 RL：DD 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州、南西諸島（沖縄）	
≪生息環境≫ 主に緩やかな流れの水域にみられる。池や沼、水田などの水草や浮遊物に付着する。	
科名	ホタル
種名	ヘイケボタル
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 山地帯から低地帯にかけて、池沼や水田周辺の湿地帯、河川のよどみ等に生息し、成虫は 5 月上旬から 8 月下旬頃まで出現する。発生期間も長い。夜間に水辺の周辺を発光しながら飛翔する。幼虫は流れの穏やかあるいは止水の水中に生息し、カワニナやタニシ類などを捕食する。	

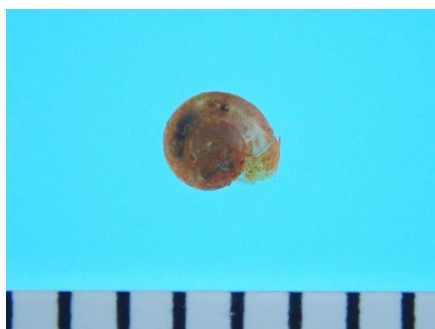
資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）



ナミウズムシ



コシダカヒメモノアラガイ



ヒラマキミズマイマイ



ヘイケボタル

写真 9. 7-5 底生動物確認状況

表 9. 7-20(1) 保全すべき種の指定状況及び特徴（昆虫類）

科名	トンボ
種名	ハラビロトンボ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 北海道（南部）、本州、四国、九州、南西諸島	
≪生息環境≫ 平地から丘陵部にかけての、日当たりが良く抽水植物の多い池沼や湿地的環境に生息する。成虫の環境選好性の幅は狭い。	
科名	トンボ
種名	ヒメアカネ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：VU	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 平地から山地にかけて樹林が隣接する湿地的環境に生息する。湿地的環境に依存しており、成虫の環境選好性の幅は狭い。	
科名	クギヌキハサミムシ
種名	エゾハサミムシ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：LP	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 落葉落枝の多い溪流沿いの林床や、ガレ場の中から見いだされる。丘陵帯においても湿度の高い林縁や沢筋などから発見されている。	
科名	バッタ
種名	ヒナバッタ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 日当たりのよい草地に生息する。乾燥した裸地に近い低茎草地を好むが、より発達した草地でも生息しており、適応環境は幅広い。親は春季から出現し、年 2 化であろうと思われる。オスはよく発音する。県内では県北部に偏った分布域を持ち、造成地や河川敷の乾燥した低茎草地で多く見られる	
科名	バッタ
種名	ショウリョウバッタモドキ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 本州、四国、九州、南西諸島	
≪生息環境≫ イネ科草本の草原に生息するが特にチガヤ群落を好む。草本類に縦に止まり静止していることが多く、生態はイナゴ類やササキリ類に類似している。 造成地などの一時的に形成された草地環境で、短期的な発生ののち移動することが多い。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）

表 9. 7-20(2) 保全すべき種の指定状況及び特徴（昆虫類）

科名	マキバサシガメ
種名	ベニモンマキバサシガメ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 山間部に生えるクルミやキリなどが生息樹木として知られるが、林縁や林床の植物にも生息する。葉裏にすることが多く、同じ生息環境に棲む他の小昆虫を捕食して生活している。丘陵から山地にかけて生息域は広い。	
科名	ヘリカメムシ
種名	ヒメトゲヘリカメムシ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 国内では海岸から山地まで生息範囲は広い。比較的乾燥した草原の地表や雑草間の根際などの環境を好む習性がある。分布範囲は広いが個体密度は決して高くなく、ヘリカメムシ科の中でも採集例は少ないと種と言える。	
科名	カメムシ
種名	イネクロカメムシ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT2	
≪特徴≫ 本州、四国、九州、南西諸島	
≪生息環境≫ イネの害虫、クロカメムシとして知られてきた種。イネをはじめサトウキビ、マコモ、ヨシなど湿った環境に生えるイネ科植物に生息する。初夏に発生する。雑草間や根際、浅い地中で成虫越冬する。	
科名	ツノトンボ
種名	キバネツノトンボ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：CR	
≪特徴≫ 本州、九州	
≪生息環境≫ 埼玉県における自然状態での主な生息環境は大きく2つに分けられる。一つは「河川沿いの河原及びその周辺部の背の低い草地」で、もう一つは「森林内が土砂崩れなどで崩壊し、一時的に生じた背の低い草地～ススキ原」である。	
科名	ホソバトビケラ
種名	ホソバトビケラ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 主に流水性であり、水質の良い河川上・中流域の流れが緩やかで河床に砂が溜まった場所に生息する。流水が流れ込む湖沼にも生息することがある。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）

表 9.7-20(3) 保全すべき種の指定状況及び特徴（昆虫類）

科名	コブガ
種名	トビイロリンガ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：DD	
≪特徴≫ 本州（関東地方以南）、四国、九州、対馬、屋久島	
≪生息環境≫ 暖地の蛾で、埼玉県は分布の北限に近い。成虫は、5～9月に出現する。食草は知られていない。	
科名	ゲンゴロウ
種名	クロズマメゲンゴロウ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：VU	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 止水性であり、湖沼、ため池、湿地、休耕田、川岸の伏流水で形成された水溜りなどに生息し、岸際など水深が浅い場所の落ち葉や水生植物が豊富な地点に見られる。	
科名	ガムシ
種名	コガムシ
≪指定状況≫ 環境省 RL：DD 埼玉県 RL：—	
≪特徴≫ 北海道・本州・四国・九州・沖縄	
≪生息環境≫ 平地の池沼や水田などに生息する。夏には、夜、灯火に飛来する。成虫は、水草や藻を好むが、幼虫は、水中で他の虫などを捕食して育つ。	
科名	ホタル
種名	ヘイケボタル
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT1	
≪特徴≫ 北海道、本州、四国、九州	
≪生息環境≫ 山地帯から低地帯にかけて、池沼や水田周辺の湿地帯、河川のよどみ等に生息し、成虫は5月上旬から8月下旬頃まで出現する。発生期間も長い。夜間に水辺の周辺を発光しながら飛翔する。	
科名	クモバチ
種名	アオスジクモバチ
≪指定状況≫ 環境省 RL：— 埼玉県 RL：NT	
≪特徴≫ 本州、四国、九州、伊豆諸島	
≪生息環境≫ 海岸から丘陵地帯の河川などの砂地に営巣する。徘徊性であるハラクロコモリグモを狩り、地中に営巣することが明らかになった。	

資料：「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）



ハシビロトンボ



ヒメアカネ



エゾハサミムシ



ヒナバッタ



ショウリョウバッタモドキ



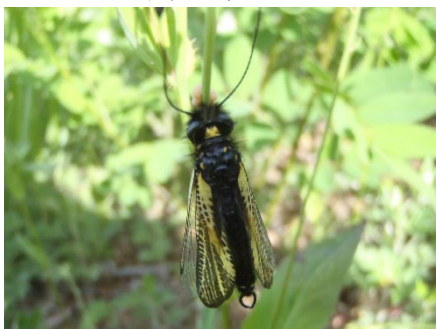
ベニモンマキバサシガメ



ヒメトゲヘリカメムシ



イネクロカメムシ



キバネツノトンボ



ホソバトビケラ

写真 9.7-6(1) 昆虫類確認状況



トビイロリンガ



クロズマメゲンゴロウ



コガムシ



ヘイケボタル



アオスジクモバチ

写真 9. 7-6 (2) 昆虫類確認状況

表 9.7-21 保全すべき種の確認状況

	種 名	選定基準 ^{注1)}			確認個体数		現地確認状況
		⑤	⑥		計画施設 用地	計画施設 用地周辺	
			繁殖 鳥	越冬 鳥			
鳥類	イカルチドリ		NT1		0	1	—
	トビ		DD		0	4	
	サシバ	VU	CR		0	1	
	ノスリ		DD	NT2	0	1	
	ハチクマ		EN		0	4	
	ハイタカ	NT	DD	NT2	0	4	
	オオタカ	NT	VU	VU	0	3	
	チョウゲンボウ		NT2		0	5	
	ハヤブサ	VU		VU	0	2	
	フクロウ		VU	NT2	0	1	
	サンショウクイ	VU	CR		0	1	
	ヤマガラ		NT2		0	25	
	トラツグミ		VU		0	1	
	キビタキ		NT1		0	16	
	ベニマシコ			NT2	0	6	
ホオジロ		NT2		2	62		
クロジ			NT2	0	1		
両生類	トウキョウサンショウウオ	VU	EN		0	38	幼生 4 卵 34
	アズマヒキガエル		VU		0	12	幼生 2 幼体 10
	ヤマアカガエル		NT1		2	1256	成体 1 幼生 1228 幼体 7 卵 22
	シュレーゲルアオガエル		NT2		0	30	成体 11 幼生 11 卵塊 8
爬虫類	ヒガシニホントカゲ	NT2	NT2		2	7	成体 8 幼体 1
	アオダイショウ	NT2	NT2		0	1	死体 1
	ヒバカリ	NT2	NT2		0	1	成体 1
	ヤマカガシ	NT2	NT2		0	1	成体 1
	ニホンマムシ	NT2	NT2		0	1	成体 1
魚類	ホトケドジョウ	EN	CR		0	11	成体 7 幼体 4
底生動物	ナミウズムシ		LP		0	2	—
	コシダカヒメモノアラガイ	DD			0	3	
	ヒラマキミズマイマイ	DD	DD		0	3	
	ヘイケボタル		NT1		0	1	
昆虫類	ハラビロトンボ		NT2		0	7	成体 7
	ヒメアカネ		VU		0	1	成体 1
	エゾハサミムシ		LP		0	1	成体 1
	ヒナバッタ		(NT1)		2	1	成体 1
	ショウリョウバッタモドキ		NT2		0	1	成体 1
	ベニモンマキバサシガメ		NT2		0	1	成体 1
	ヒメトゲヘリカメムシ		NT1		0	3	成体 3
	イネクロカメムシ		NT2		0	1	成体 1
	キバネツノトンボ		CR		1	6	成体 7
	ホソバトビケラ		NT1		0	1	成体 1
	トビイロリンガ		DD		0	1	成体 1
	クロズマメゲンゴロウ		(VU)		0	1	成体 1
	コガムシ	DD			0	1	成体 1
	ヘイケボタル		NT1		0	4	成体 4
	アオスジクモバチ	DD	LP		0	1	成体 1

注1) 保全すべき種の選定基準及びランクは以下の通りである。

なお、表9.7-1に示した保全すべき種の選定基準のうち、①～④は該当する種が確認されていないことから、本表には掲載しなかった。

⑤「環境省レッドリスト2020」（令和2年3月、環境省）に記載されている種

⑥「埼玉県レッドデータブック2018 動物編」（2018年、埼玉県）に記載されている種

注2) 選定基準欄の略称は、以下のとおりである。

環境省カテゴリー Ex：絶滅、Ew：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

埼玉県カテゴリー Ex：絶滅、Ew：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群、RT：地帯別危惧

(2) 予 測

1) 工事中及び存在・供用時における動物への影響

① 予測内容

工事中及び存在・供用時における、保全すべき種の生息地の改変の程度及びその他の生息環境への影響の程度を予測した。

② 予測地域・予測地点

調査地域・調査地点と同様とした。

③ 予測対象時期

工事中については、保全すべき種及びその生息地、生息環境への影響が最大と考えられる時期とした。

存在・供用時については、保全すべき種及びその生息地、生息環境への影響を的確に把握できる時期とした。

④ 予測方法

事業計画による動物の生息基盤である植生及び地形とその生息確認位置との重ね合わせによる推定及び、類似事例又は既存知見を参考にして予測した。

影響予測は、計画施設用地周辺における保全すべき動物種の生息地の改変の程度、生息環境の変化について予測した。

保全すべき動物種についての影響予測の流れは、図 9.7-9 に示すとおりである。

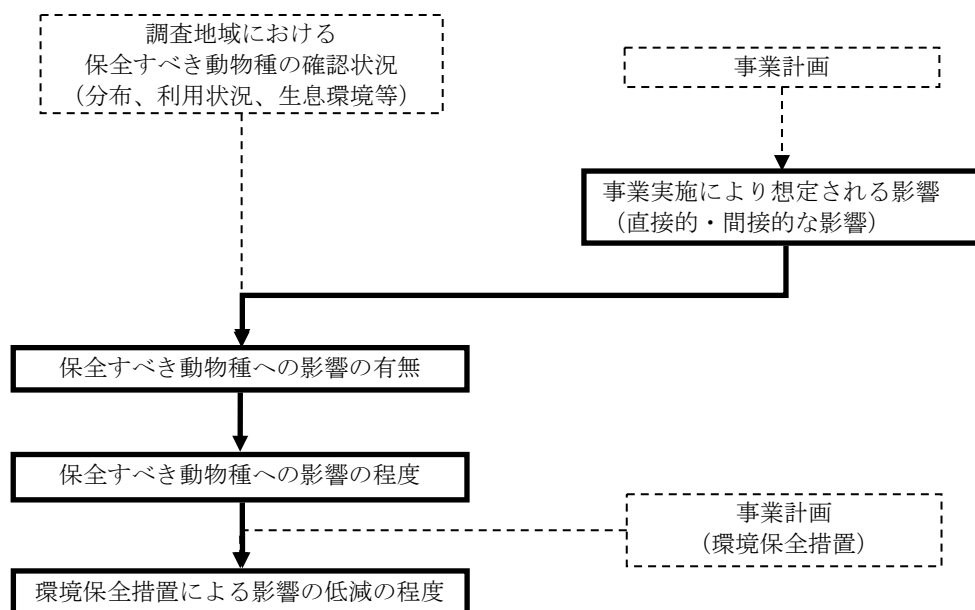


図 9.7-9 保全すべき動物種についての影響予測の流れ

⑤ 予測条件

工事中における建設機械の稼働及び資材運搬等の車両に関連する騒音・振動対策、水質汚濁防止対策等は、「第2章 対象事業の目的及び概要 2.6 対象事業の概要 (7) 工事計画 3) 工事に係る環境保全計画」に示すとおりである。

⑥ 予測結果

計画施設用地内において、ホオジロ、ヤマアカガエル、ヒガシニホントカゲ及びヒナバッタの保全すべき種4種が確認されているものの、これらの種の本来の生息地は計画施設地周辺の樹林地や草地環境であり、生息環境からの移動中や通過中に確認されたものであると考えられる。また、本事業の緩衝緑地を含む計画施設用地周辺においては生息地は直接改変されないため、事業実施に伴う生息環境の消失と生息環境の変化等の直接影響は生じないものと予測する。

一方、間接的な影響として、資材運搬等の車両の走行による移動経路の分断、資材運搬等の車両の走行及び建設機械の稼働等による騒音・振動の発生、濁水流出による河川の水質変化、夜間照明による光環境の変化が考えられる。

このうち、濁水流出による河川の変化については、工事中は沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画地外に放流するため、間接的な影響は極めて小さいと予測する。供用時には、「第9章 9.5 水質 (3) 評価 2) 評価結果」に示した回避及び低減措置を講じるとともに、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流するため、計画地周辺の保全すべき種の生息環境への間接的な影響はないと予測する。

夜間照明による光環境の変化については、現状でも既存施設が24時間稼働しており、また、建設機械の稼働時間は原則として午前8時から午後6時までの時間であり、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。

表 9.7-22 本事業で想定される影響の種類と時期

影響の種類	想定される影響	工事中	供用時	判断理由等
直接的な影響	生息環境の消失	—	—	・本事業では、計画施設用地及びその周辺において保全すべき種の生息地を直接改変することはないことから、生息環境の消失や減少、変化といった直接的な影響はないと考えられる。
間接的な影響	移動経路の分断	—	—	・本事業では、計画施設用地以外での改変は無いことから移動経路への影響を受けないと考えられる。
	騒音・振動	△	△	・本事業では、計画施設用地以外での改変は無いものの、計画施設用地施設用地内から発生する資材運搬等の車両の走行及び建設機械の稼働等による騒音・振動の発生による影響が考えられるが、工事に際して、建設機械は低騒音・低振動型の使用、資材運搬等の車両の走行に関して、アイドリングストップの周知・徹底や運行管理等の配慮することから騒音・振動による影響は小さいと考えられる。
	水質の変化	×	×	・工事中は沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから、計画施設用地周辺の水質の変化はほぼなく、マメゲンゴロウ等の水生昆虫類やホトケドジョウなどへの生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 ・供用時は「第9章 9.5 水質 (3) 評価 2) 評価結果」に示した回避及び低減措置を講じ、現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流するとともに、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、計画施設用地周辺の保全すべき種の生息環境への間接的な影響はないと考えられる。
	光環境の変化	×	×	・現状でも既存施設が24時間稼働しており、また、建設機械の稼働時間は原則として午前8時から午後6時までの時間であり、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。

注) 表中の凡例

○：影響が想定される。

△：影響はあるが、最大となる影響は一時的であり、影響は小さいと考えられる。もしくは、工事計画や事業計画から、影響は小さいと考えられる。

×：本事業では影響は限定的であり、影響は極めて小さいと考えられる。

—：影響はないと考えられる。

(ア) 各種の予測結果

保全すべき種への影響の予測結果は、表 9.7-23(1)～(46)に示すとおりである。

表 9.7-23(1) 保全すべき種への影響の予測結果（イカルチドリ）

項 目	内 容			
生息環境	砂礫地のある河川や湖沼で繁殖する。河川では上流から中流域に生息する。繁殖期以外の季節には休耕田や下流域にも出現するが、海岸や干潟に出ることは少ない。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の造成地で幼鳥のとり 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、砂礫地のある河川や湖沼、休耕田であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、保全すべき種の生息環境への間接的な影響はないと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(2) 保全すべき種への影響の予測結果（トビ）

項 目	内 容			
生息環境	平地から高山にかけて市街地、湖沼など幅広い場所で見られる。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の高空を通過する個体 1 例が確認された。 春 季：計画施設用地周辺の造成地で飛翔する個体 1 例が確認された。 繁殖期：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で飛翔する個体 1 例が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の工場地で飛翔する個体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	4 例
予測結果	計画施設用地外で確認された本種は 4 例で、計画施設用地内では確認されておらず、生息環境の一部と考えられる計画施設地周辺の改変はないことから本種の生息地は残される。 本種の生息環境は、市街地、海岸、湖沼など多様な環境を利用する種であり、計画施設用地内外に広く分布していることから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、保全すべき種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(3) 保全すべき種への影響の予測結果（サシバ）

項 目	内 容			
生息環境	低山の林で繁殖し、林縁や農耕地、山林などでカエル類、トカゲ類、ヘビ類、ネズミ類、鳥類などを捕食する。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で飛翔する個体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、林縁や農耕地、山林などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生は、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、保全すべき種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(4) 保全すべき種への影響の予測結果（ノスリ）

項 目	内 容			
生息環境	山地の森林や岩壁で繁殖するが、低地での繁殖確認が増えている。冬は農耕地、河川敷などの見通しのよい場所で見られる。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で飛翔する個体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、山地の森林や農耕地、河川敷などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、また、濁水の発生は、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、保全すべき種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (5) 保全すべき種への影響の予測結果（ハチクマ）

項 目	内 容			
生息環境	丘陵帯、低山帯、山地帯の各地に夏鳥として渡来し繁殖していたが、現在、県内での繁殖情報が極めて少なくなっている。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地で記録される。			
現地確認状況	猛禽類調査：５月に７例、７月に３例が確認された。繁殖の兆候はみられなかった。			
	計画施設用地内	０例	計画施設用地外	４例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は４例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、丘陵帯、低山帯、山地帯の各地としており、計画施設用地内外は飛翔経路の一部と考えられるが改変は無いことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水による生息環境の質的変化はほぼなく保全すべき種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。また、濁水の発生は、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (6) 保全すべき種への影響の予測結果（ハイタカ）

項 目	内 容			
生息環境	冬季は平地の林、農耕地、河川敷などに生息するが個体数は多くない。現在はやや増加傾向にある。県内でも夏季に山地に生息するが、繁殖の状況についてはよくわかっていない。春秋の渡りの時期には通過と思われる個体が県内各地で記録される。			
現地確認状況	猛禽類調査：２月に２例、３月に２例が確認された。繁殖の兆候はみられなかった。			
	計画施設用地内	０例	計画施設用地外	４例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は４例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、農耕地、河川敷などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (7) 保全すべき種への影響の予測結果（オオタカ）

項 目	内 容			
生息環境	留鳥として平地から山地の林や農耕地、河川敷などに生息する。かつて、低地帯では冬季でも生息数が少なかったが、現在は低地帯の社寺林や屋敷林などで営巢するものが増えている。個体数は増加傾向にあるようだが、生息地の環境は必ずしも良くなっていない。			
現地確認状況	猛禽類調査：1 月に 1 例、2 月に 1 例、7 月に 1 例が確認された。繁殖の兆候はみられなかった。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	3 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 3 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、山地の林や農耕地、河川敷などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生は、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (8) 保全すべき種への影響の予測結果（チョウゲンボウ）

項 目	内 容			
生息環境	1980 年代頃より、低地帯の高架橋や取水塔のような人工建造物に営巣するようになり市街地でもよく見られるようになった。さいたま市内のビルではかなり以前から繁殖しているのが知られている。冬季は河川敷や農耕地、草地等の開けた場所でもよく見られる。			
現地確認状況	猛禽類調査：1 月に 3 例、2 月に 2 例が確認された。繁殖の兆候はみられなかった。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	5 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 5 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、河川敷や農耕地、草地などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(9) 保全すべき種への影響の予測結果（ハヤブサ）

項 目	内 容			
生息環境	県内には冬鳥として渡来し、平地から山地の河川敷、農耕地、湖沼、ダム湖などに生息する。現在はやや増加傾向にあり、夏季の観察記録もある。県内でも人工構造物に営巣し、繁殖する兆候がある。			
現地確認状況	猛禽類調査：4月に1例、7月に1例が確認された。繁殖の兆候はみられなかった。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	2 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は2例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、平地から山地の河川敷、農耕地、湖沼、ダム湖などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(10) 保全すべき種への影響の予測結果（フクロウ）

項 目	内 容			
生息環境	平地から山地の林に棲み大木の樹洞に営巣するが、オオタカの子巣や農家の納屋に産卵することもある。夜行性のため不明な点も多い。県内の低地帯から亜高山帯で幅広く繁殖している。冬は低地へ漂行するものもいる。			
現地確認状況	冬 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で囀り1例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は1例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、平地から山地の林であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、現状でも既存施設が24時間稼働しており、夜間において照明による光環境の変化は極めて少ないと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (11) 保全すべき種への影響の予測結果（サンショウクイ）

項 目	内 容			
生息環境	標高の低い山地や山麓の大きな落葉樹のある林に生息する。巣は大木の地上から数m以上の横枝につくる。樹上で昆虫などを捕り、高い枯れ枝や梢に直立した姿勢でとまる。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で囀り 1 例が確認された。			
	計画施設用地	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、山地や山麓の大きな落葉樹のある林であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (12) 保全すべき種への影響の予測結果（ヤマガラ）

項 目	内 容			
生息環境	平地から山地の林に生息する。県内では丘陵帯から山地帯の森林に生息し繁殖する。冬季に好物のエゴノキの実を探している姿がよく見られる。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の乾性草地でとまり 1 例（延べ 2 個体）が確認された。 冬 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林やスギ・ヒノキ植林でとまりや地鳴き 4 例（延べ 6 個体）が確認された。 春 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林でとまりや囀り、地鳴き 4 例（延べ 4 個体）が確認された。 繁殖期：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林でとまりや飛翔、囀り、地鳴き 6 例（延べ 9 個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や乾性草地でとまりや飛翔、囀り、地鳴き 3 例（延べ 4 個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	18 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 18 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、丘陵帯から山地帯の森林であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(13) 保全すべき種への影響の予測結果（トラツグミ）

項 目	内 容			
生息環境	低山から亜高山帯の山地の林に生息する。県内では丘陵帯から亜高山帯までの森林で繁殖するが、減少傾向にあり、現在では丘陵部での繁殖記録が途絶えている。山地部においても減少傾向にある。冬季には、低地帯にも漂行し、市街地の公園や社寺林、人家の庭にも出現する。			
現地確認状況	冬 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林でとまり 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、森林や市街地の公園や社寺林などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(14) 保全すべき種への影響の予測結果（キビタキ）

項 目	内 容			
生息環境	本種は平地から山地のよく繁った落葉広葉樹林や常緑広葉樹林に生息、繁殖する。1960 年代の燃料革命以後、雑木林の萌芽更新が行われなくなり、林が成熟してきたため、樹の間の空間で昆虫を捕らえる本種の生息にとって好適な環境が増えてきた。また、スギやヒノキが混じった針広混交林などにも生息する。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で囀り 4 例が確認された。 繁殖期：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で囀り 8 例が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や低木林でとまりや囀り、地鳴き 3 例（延べ 4 個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	15 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 15 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、落葉広葉樹林や常緑広葉樹林であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(15) 保全すべき種への影響の予測結果（ベニマシコ）

項 目	内 容			
生息環境	繁殖期には平地の低木のある草原、川に沿った低木林、林縁などにすみ、ハマナス、ニワトコなどの低木の枝に営巣する。越冬季には低地から山地の低木の茂みや山麓・丘陵地に近い河川のヨシ原などにすむ。			
現地確認状況	冬 季：計画施設用地周辺の低木林や乾性草地、法面草地でとまりや地鳴き 5 例（延べ 6 個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	5 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 6 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、平地の低木のある草原、川に沿った低木林、林縁などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(16) 保全すべき種への影響の予測結果（ホオジロ）

項 目	内 容			
生息環境	林縁の藪、植木畑周辺、河川敷の灌木等で繁殖するが、低地帯で繁殖に適する環境が減少している。冬は河川敷等で草本類の種子を採食しているところがよく見られる。県内では低地帯から山地帯まで留鳥として広く分布する。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の乾性草地でとまりや地鳴き 5 例が確認された。 冬 季：計画施設用地内の落葉広葉樹でとまり 1 例が確認された。計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や乾性草地、湿生草地、法面草地でとまりや飛翔、囀り、地鳴き 10 例（延べ 17 個体）が確認された。 春 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林やアカマツ林、低木林、乾性草地、電線でとまりや囀り、地鳴き 11 例（延べ 11 個体）が確認された。 繁殖期：計画施設用地内の落葉樹で囀り 1 例が確認された。計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や低木林、乾性草地、湿生草地、路傍、植栽帯、電線、造成地でとまりや飛翔、囀り、地鳴き 17 例（延べ 19 個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や乾性草地、電線でとまりや囀り 10 例が確認された。			
	計画施設用地内	2 例	計画施設用地外	55 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 55 例で、計画施設用地内での確認は計画施設用地境界にある樹木での確認 2 例であるが、周辺樹林からの移動利用であると考えられる。 本種の生息環境は、林縁の藪、植木畑周辺、河川敷の灌木等であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(17) 保全すべき種への影響の予測結果（クロジ）

項 目	内 容			
生息環境	夏季は亜高山帯のササなどの下層植生の豊かな樹林地で繁殖し、冬季は平地から山地の林などで越冬する。北海道では平地林でも繁殖する。春秋の渡り期には観察記録がやや多くなる。時には、人家の庭に姿を見せることがある。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の乾性草地で地鳴き 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、下層植生の豊かな樹林地や平地から山地の林などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(18) 保全すべき種への影響の予測結果（トウキョウサンショウウオ）

項 目	内 容			
生息環境	低山や丘陵地の雑木林などに生息し、谷戸に散在する水田やその水路、地下水が出ている水たまりなどに 2～4 月ごろ産卵する。幼生は水田や流れの緩い水路などに生息し、上陸後は落ち葉が溜まった林床などで生活するため、に人の目に触れることは少ない。			
現地確認状況	早春季：計画施設用地周辺の止水域で卵塊 3 例（延べ 29 個）が確認された。 春 季：計画施設用地周辺の止水域で幼生 1 例（3 個体）、卵塊 2 例（延べ 5 個）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の止水域で幼生 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	7 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 7 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、低山や丘陵地の雑木林及び繁殖可能な水域などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから、濁水による生息環境の質的变化はほぼなく保全すべき種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (19) 保全すべき種への影響の予測結果（アズマヒキガエル）

項 目	内 容			
生息環境	山地から平地まで幅広く分布し、おもに林床で生息している。山地の樹林帯から都市公園や人家近くの緑地でも確認され、様々な環境に適応している。産卵は3～5月頃に水深の浅い池沼などでおこなわれ、長いひも状の卵塊を産む。産卵期以外は水辺から離れた場所でも確認される。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や低木林、乾性草地、湿生草地、路傍、舗装道路、造成地で幼体12例（延べ13個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	12 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は12例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、山地の樹林帯から都市公園や人家近くの緑地であり、計画施設用地に樹林帯は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (20) 保全すべき種への影響の予測結果（ヤマアカガエル）

項 目	内 容			
生息環境	丘陵地の人家に近い里山から、山地の森林奥深くまで林床や溪流の周りに生息している。産卵期は地域や標高などによって差があり、埼玉県内ではだいたい2～4月頃である。山林に隣接した湿田、湿地、浅い池沼、小さな水たまりなどが産卵に使われる。			
現地確認状況	早春季：計画施設用地周辺の止水域で成体1例、幼生2例（延べ1200個体）、卵塊8例（延べ22個）が確認された。 春 季：計画施設用地周辺の止水域で幼生3例（延べ14個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や乾性草地、止水域、水路で幼体5例（延べ8個体）、幼生3例（延べ13個体）が確認された。			
	計画施設用地内	2 例	計画施設用地外	22 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は24例で、計画施設用地内では2例確認されたが、北側敷地境界沿いの樹林付近での確認であったことから、周辺樹林からの移動利用であると考えられる。 本種の生息環境は、山林や山林に隣接した湿田、湿地であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(21) 保全すべき種への影響の予測結果（シュレーゲルアオガエル）

項 目	内 容			
生息環境	低山から丘陵地にかけて雑木林などに生息している。3～5月頃に雑木林など生息地に隣接した水田の畦や湿地に泡状の卵塊を産む。主たる産卵場所である水田と雑木林などの生息地双方の場所が必要であり、里山環境に適応した種である。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の止水域や水路で幼生 1 例、成体 4 例（延べ 9 個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林や止水域で成体 2 例（延べ 2 個体）、幼生 1 例（10 個体）、卵塊 3 例（計 8 個）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	11 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 11 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、雑木林や雑木林に隣接した水田等であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、保全すべき種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23(22) 保全すべき種への影響の予測結果（ヒガシニホントカゲ）

項 目	内 容			
生息環境	低地から山地まで広範囲に生息し、林地から開けている林道沿いや、川辺などの日当たりが良い場所に昼間みられる。寺社の石垣など隠れ場所や日光浴に適している環境があれば、都市部の住宅地でもみられる。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地内の工場地で成体 1 例が確認された。 春 季：計画施設用地内の工場地で成体 2 例が確認された。計画施設用地周辺の路傍や造成地で成体 2 例が確認された。 夏 季：計画施設用地内の工場地で成体 1 例が確認された。計画施設用地周辺の舗装道路や造成地で成体 2 例、幼体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	4 例	計画施設用地外	7 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 11 例で、計画施設用地内では 4 例が確認されているものの、本種の生息環境は、今後とも施設用地内外に残される。 本種の生息環境は、林地や川辺、寺社、市街地であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (23) 保全すべき種への影響の予測結果（アオダイショウ）

項 目	内 容			
生息環境	低地から山地まで広く生息している。水辺をよく好み、水田、畑地、湿地、池沼の周辺などでみられる。餌としてカエル、ミミズ、魚類を好むが、カエルに依存する傾向が強い。夕方から早朝にかけて活動し、小型で地味な体色のため、人目にふれにくい種である。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の水路脇の草地で成体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、及び生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (24) 保全すべき種への影響の予測結果（ヒバカリ）

項 目	内 容			
生息環境	低地から山地まで広く生息し、森林、水田、住宅地まで様々な環境に適応している。樹上性が強く、鳥類のヒナや卵、ネズミ類を好み、幼蛇はカエルやトカゲを餌とするため、これら餌資源が豊富な里山環境は生息適地といえる。昼行性で人家（特に木造家屋）にもよく棲みつき、人目にふれやすい種である。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の舗装道路で死体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されていなかったことから、生息地は残される。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (25) 保全すべき種への影響の予測結果（ヤマカガシ）

項 目	内 容			
生息環境	低地から山地まで広く生息し、森林とその周辺の水田、湿地、池沼、河川敷から人家近くまで多様な環境でみられる。餌はネズミやカエル類をはじめ、小型の脊椎動物を食べる。主に夜行性であるが、日光浴など昼間活動することもあるため、身近な環境でもみられる。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で成体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、水田、湿地、池沼、河川敷などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (26) 保全すべき種への影響の予測結果（ニホンマムシ）

項 目	内 容			
生息環境	低地帯から山地帯まで広く生息している。分布の中心は水田や雑木林の多い台地・丘陵帯で、河川敷でもよくみかける。餌資源をカエル類に依存するため、水田の減少は個体数の減少に直結し、特に低地帯では生息適地の局所化が顕著な県南部、東部で稀である。 台地・丘陵帯も水田の減少に加え宅地・工業団地・道路造成など大規模開発により、生息適地の分断化や消失がみられるが、個体数の減少はシマヘビほど顕著でないと考えられる。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の止水域で成体 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 工事中は、騒音・振動発生による生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、使用建設機械の稼働時間等の配慮及び資材運搬等の車両の運行管理により間接的影響は小さいと考えられる。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (27) 保全すべき種への影響の予測結果（ホトケドジョウ）

項 目	内 容			
生息環境	河川の中流域に主に生息する。小河川の源流付近や湧水が残り、サワガニの生息や、水生植物が自生するような水域が適している。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の水路で成体 4 例（延べ 5 個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の水路や止水域で成体 3 例、幼体 2 例（延べ 4 個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	9 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 9 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、小河川の源流付近や湧水がある水域であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (28) 保全すべき種への影響の予測結果（ナミウズムシ）

項 目	内 容			
生息環境	本州（関東地方）では低地帯から山地帯にかけて広く分布し、水質の BOD 値が 3ppm 以下の清水環境下に生息し、湧水や河川の源流付近、清流の波立つ瀬の部分に見られる。			
現地確認状況	春季：計画施設用地周辺の水路で 1 例（延べ 2 個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、湧水や河川の源流付近であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (29) 保全すべき種への影響の予測結果（コシダカヒメモノアラガイ）

項 目	内 容			
生息環境	水田の畦や用水路，河川などの止水的環境に生息する。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の水路で 1 例（延べ 3 個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の水路で 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	2 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 2 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、水田の畦や用水路，河川などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (30) 保全すべき種への影響の予測結果（ヒラマキミズマイマイ）

項 目	内 容			
生息環境	主に緩やかな流れの水域にみられる。池や沼、水田などの水草や浮遊物に付着する。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の水路で 1 例（3 個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の水路で 2 例（延べ 8 個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	3 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 3 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、主に緩やかな流れの水域であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (31) 保全すべき種への影響の予測結果（ヘイケボタル）

項 目	内 容			
生息環境	山地帯から低地帯にかけて、池沼や水田周辺の湿地帯、河川のよどみ等に生息し、成虫は5月上旬から8月下旬頃まで出現する。発生期間も長い。夜間に水辺の周辺を発光しながら飛翔する。幼虫は流れの穏やかあるいは止水の水中に生息し、カワナやタニシ類、ヒメモノアラガイなどを捕食する。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の水路で1例（延べ3個体）が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は1例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、池沼や水田周辺の湿地帯、河川のよどみ等であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (32) 保全すべき種への影響の予測結果（ハラビロトンボ）

項 目	内 容			
生息環境	平地から丘陵部にかけての、日当たりが良く抽水植物の多い池沼や湿地的環境に生息する。成虫の環境選好性の幅は狭い。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の乾性草地で成虫1例（延べ3個体）が確認された。 初夏季：計画施設用地周辺の乾性草地や湿生草地で成虫2例（延べ3個体）が確認された。 夏 季：計画施設用地周辺の湿生草地で成虫1例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	4 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は4例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、抽水植物の多い池沼や谷戸の湿地であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23(33) 保全すべき種への影響の予測結果（ヒメアカネ）

項 目	内 容			
生息環境	平地から山地にかけて樹林が隣接する湿地的環境に生息する。湿地的環境に依存しており、成虫の環境選好性の幅は狭い。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の湿生草地で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、樹林が隣接する湿地的環境であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23(34) 保全すべき種への影響の予測結果（エゾハサミムシ）

項 目	内 容			
生息環境	落葉落枝の多い溪流沿いの林床や、ガレ場の中から見いだされる。丘陵帯においても湿度の高い林縁や沢筋などから発見されている。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、落葉落枝の多い溪流沿いの林床などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (35) 保全すべき種への影響の予測結果（ヒナバタ）

項 目	内 容			
生息環境	日当たりのよい草地に生息する。乾燥した裸地に近い低茎草地を好むが、より発達した草地でも生息しており、適応環境は幅広い。親は春季から出現し、年2化であろうと思われる。オスはよく発音する。県内では県北部に偏った分布域を持ち、造成地や河川敷の乾燥した低茎草地で多く見られる			
現地確認状況	初夏季：計画施設用地内の乾性草地で成虫 1 例（延べ 2 個体）が確認された。計画施設用地周辺の乾性草地で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	1 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では 1 例の確認されているものの、本種の生息環境は造成地や河川敷などの乾燥した草地的な環境で今後の施設用地内外に残される。 本種の生息環境は、日当たりのよい草地や乾燥した裸地に近い低茎草地であり、計画施設用地内外にこのような環境は存在していることから事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (36) 保全すべき種への影響の予測結果（ショウリョウバッタモドキ）

項 目	内 容			
生息環境	イネ科草本の草原に生息するが特にチガヤ群落を好む。草本類に縦に止まり静止していることが多く、生態はイナゴ類やササキリ類に類似している。造成地などの一時的に形成された草地環境で、短期的な発生ののち移動することが多い。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の乾性草地で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、イネ科草本の草原であり、計画施設用地内外にこのような環境は存在していることから事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (37) 保全すべき種への影響の予測結果（ベニモンマキバサシガメ）

項 目	内 容			
生息環境	山間部に生えるクルミやキリなどが生息樹木として知られるが、林縁や林床の植物にも生息する。葉裏にすることが多く、同じ生息環境に棲む他の小昆虫を捕食して生活している。丘陵から山地にかけて生息域は広い。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の落葉広葉樹林で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、林縁や林床であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (38) 保全すべき種への影響の予測結果（ヒメトゲヘリカメムシ）

項 目	内 容			
生息環境	国内では海岸から山地まで生息範囲は広い。比較的乾燥した草原の地表や雑草間の根際などの環境を好む習性がある。分布範囲は広いが個体密度は決して高くなく、ヘリカメムシ科の中でも採集例は少ないと種と言える。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺の乾性草地で成虫 1 例が確認された。 春 季：計画施設用地周辺の乾性草地で成虫 1 例が確認された。 初夏季：計画施設用地周辺の乾性草地で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	3 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 3 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、草原の地表や雑草間の根際などの環境であり、計画施設用地内外にこのような環境は存在していることから事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (39) 保全すべき種への影響の予測結果（イネクロカメムシ）

項 目	内 容			
生息環境	イネの害虫、クロカメムシとして知られてきた種。イネをはじめサトウキビ、マコモ、ヨシなど生育する湿った環境に生えるイネ科植物に生息する。初夏に発生する。雑草間や根際、浅い地中で成虫越冬する。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の湿生草地で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、湿地であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (40) 保全すべき種への影響の予測結果（キバネツノトンボ）

項 目	内 容			
生息環境	埼玉県における自然状態での主な生息環境は、河川沿いの河原及びその周辺部の背の低い草地、森林内が土砂崩れなどで崩壊し、一時的に生じた背の低い草地～ススキ原といった 攪乱地である。成虫は 5～6 月に発生する。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地内の乾性草地で成虫 1 例が確認された。対象事業区域周辺の乾性草地で 2 例（延べ 5 個体）が確認された。			
	初夏季：計画施設用地周辺の造成地で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	1 例	計画施設用地外	3 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 4 例で、計画施設用地内では 1 例の確認されているものの、本種の生息環境は、今後とも計画施設用地外に広く残される。 本種の生息環境は、河川沿いの河原及びその周辺部の背の低い草地等であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中の濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (41) 保全すべき種への影響の予測結果（ホソバトビケラ）

項 目	内 容			
生息環境	主に流水性であり、水質の良い河川上・中流域の流れが緩やかで河床に砂が溜まった場所に生息する。流水が流れ込む湖沼にも生息することがある。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺のライトトラップ（IL2）で成虫 1 個体が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、流れが緩やかな河川であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定して使用し、緑地に向けてないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的变化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9. 7-23 (42) 保全すべき種への影響の予測結果（トビイロリンガ）

項 目	内 容			
生息環境	暖地の蛾で、埼玉県は分布の北限に近い。成虫は、5～9 月に平地の人里周辺の林に出現する。			
現地確認状況	秋 季：計画施設用地周辺のライトトラップ（IL2）で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、人里周辺の林であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的变化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定して使用し、緑地に向けてないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23(43) 保全すべき種への影響の予測結果（クロズマメゲンゴロウ）

項 目	内 容			
生息環境	平地の池沼や水田などに生息する。夏には、夜、灯火に飛来する。成虫は、水草や藻を好むが、幼虫は、水中で他の虫などを捕食して育つ。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の止水域で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、平地の池沼や水田などであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23(44) 保全すべき種への影響の予測結果（コガムシ）

項 目	内 容			
生息環境	止水性であり、湖沼、ため池、湿地、休耕田、川岸の伏流水で形成された水溜りなどに生息し、岸際など水深が浅い場所の落ち葉や水生植物が豊富な地点に見られる。			
現地確認状況	春 季：計画施設用地周辺の止水域で成虫 1 例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は 1 例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、休耕田や川岸の伏流水で形成された水たまりであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が 24 時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (45) 保全すべき種への影響の予測結果（ヘイケボタル）

項 目	内 容			
生息環境	山地帯から低地帯にかけて、池沼や水田周辺の湿地帯、河川のよどみ等に生息し、成虫は5月上旬から8月下旬頃まで出現する。発生期間も長い。夜間に水辺の周辺を発光しながら飛翔する。幼虫は流れの穏やかあるいは止水の水中に生息し、カワニナやタニシ類、ヒメモノアラガイなどを捕食する。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の乾性草地や湿生草地、未舗装道路で成虫4例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	4 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は4例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、水田周辺や河川の淀みであり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が24時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

表 9.7-23 (46) 保全すべき種への影響の予測結果（アオスジクモバチ）

項 目	内 容			
生息環境	海岸から丘陵地帯の河川などの砂地に営巣する。徘徊性であるハラクロコモリグモを狩り、地中に営巣することが明らかになった。			
現地確認状況	夏 季：計画施設用地周辺の乾性草地で成虫1例が確認された。			
	計画施設用地内	0 例	計画施設用地外	1 例
予測結果	計画施設用地内外で確認された本種は1例で、計画施設用地内では確認されなかったことから、生息地は残される。 本種の生息環境は、河川などの砂地であり、計画施設用地にこのような環境は存在しないことから、事業の実施に伴う改変等の影響はないと考えられる。 工事中は、光環境の変化といった生息環境の質的変化が生じる可能性があるが、現状でも既存施設が24時間稼働しており、また、極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定して使用し、緑地に向けないように配慮することから、夜間において照明による光環境の変化はほぼなく、生息環境への間接的な影響は極めて小さいと予測する。また、濁水の発生については、沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流することから生息環境の質的変化はほぼなく、本種の生息環境への影響は極めて小さいと考えられる。 供用時には、施設の稼働に伴う公共用水域の水質への影響が考えられるが、生活排水については現況と同様に排水路を介して天神沢川へ放流することから、本種の生息環境への間接的な影響は極めて小さいと考えられる。 したがって、予測地域における本種の生息環境の改変による影響はなく、生息環境への間接的影響は極めて小さいと考えられる。			

(3) 評 価

1) 工事中及び存在・供用時における動物への影響

① 評価方法

(ア) 影響の回避・低減の観点

工事中及び存在・供用時における動物への影響が、事業者により実行可能な範囲内でできる限り回避され、または低減されているかどうかについて明らかにした。

(イ) 基準・目標等との整合の観点

動物の予測結果が、表 9.7-24 に示す整合を図るべき基準等と整合が図られているかどうかを明らかにした。

具体的には、上位計画等に定める方針を踏まえ、「自然環境への影響の緩和に努めること」とした。

表 9.7-24 整合を図るべき基準等

項 目	整合を図るべき基準等
「埼玉県環境基本計画（第4次）」（平成29年、埼玉県）	「長期的な目標」 ・恵み豊かなみどりや川に彩られ、生物の多様性に富んだ自然共生社会づくり
「埼玉県生物多様性保全戦略」（平成30年、埼玉県）	「生物多様性の保全のための企業に求められる役割」 ・事業者は、事業活動が生物多様性からの恵みに支えられていることを念頭に、原材料の調達などにおいて生物多様性に配慮した選択を行うとともに、事業活動全般において生物多様性保全のための社会的責任や社会貢献を果たすこと。
「第2次寄居町環境基本計画」（平成29年、寄居町）	「寄居町の環境保全行動プロジェクト」 ・豊かな山の緑の保全・活用のために事業者が実施する環境保全行動 －開発行為を行う場合は、緑地や生態系の保全、自然景観との調和等に配慮する。 －建設事業においては、自然環境への影響の緩和に努める。 －事業所内の緑化に努め、緑のネットワークを広げる。 ・生き物と生き物の生育・生息空間の確保のために事業者が実施する環境保全行動 －建設事業においては、生態系への影響の緩和に努める。 －自然観察会の開催などに協力する。 －動植物の保全活動に協力する。

2) 評価結果

① 影響の回避・低減の観点

本事業では、計画施設用地内及びその周辺において保全すべき種の生息地を直接改変することはないため、事業実施に伴う生息環境の消失や質的变化等の直接的影響は生じないものとする。

工事中及び存在・供用時における動物への影響（間接的影響として騒音・振動の変化、水質の変化、光環境の変化）が考えられるが、表 9.8-25 に示す環境の保全のための措置を講ずることで、周辺環境への影響の低減に努める。

以上のことから、動物への影響は、事業者により実行可能な範囲内でできる限り低減されていると評価する。

表 9.8-25 動物に関する環境の保全のための措置

影響要因	影響	検討の視点	環境の保全のための措置	措置の区分
建設機械の稼働、 資材運搬車両等の走行	生息環境の変化(騒音・振動)	騒音・振動への配慮	・建設機械は低騒音・低振動型のものを採用する。 ・資材運搬等の車両の走行に関して、アイドリングストップの周知・徹底や運行管理など配慮する。	低減
	生息環境の変化(水質)	濁水の流出抑制	・工事中は沈砂槽を設置し、土粒子を沈殿させた後、上澄み水を計画施設用地外に放流する	低減
	生息環境の変化(光環境)	夜間照明の配慮	・建設機械の稼働時間は原則として午前8時から午後6時までとする。 ・資材運搬等の車両（大型車）の走行時間は原則として午前8時から午後6時までとする。 ・極力工事照明は使用せず、使用する際は必要な箇所に限定し、緑地に向けないように配慮する。	低減
施設の稼働	生息環境の変化(水質)	濁水の流出抑制	・供用時には、「第9章 9.5 水質 (3) 評価 2) 評価結果」に示した回避及び低減措置を講じる。	低減
施設の稼働、 廃棄物運搬車両等の走行	生息環境の変化(光環境)	夜間照明の配慮	・廃棄物運搬車両等（大型車）の走行時間は、既存施設と同様とし、概ね7時から午後6時とする。 ・計画建物や構内に設置する照明は、可能な限り、緑地に向けないように配慮する。	低減

② 基準・目標等との整合の観点

本事業による生息環境の消失や質的变化等の影響は生じないものと考え、水質の変化及び光環境の変化についても、環境保全のための措置を講じることで保全すべき動物種及び生息環境は保全され则认为する。

以上のことから、整合を図るべき基準等と予測結果との間に整合が図られていると評価する。